

## 教育と経済・社会を考える 第9回 教育と格差の再生産

福田光宏

### 1. 経済的格差→教育格差

社会・経済・文化的格差が教育格差を生み出し、教育格差が社会・経済・文化的格差を生み出すという連鎖により、社会階層が世代間で継承され、固定化されるという「教育と格差」に関する論議は、段階的に考えることができる。

第一段階は、お金が無いので、授業料・入学金を払えない、教材を買えない、学業期間中の生活費を賄えない、だから、高校や大学に進学できないと考える段階である。これは、教育の無償化や奨学金の支給などの教育費の補助で、ある程度は解決できる問題であるが、日本では、教育費の補助は未だ不十分である。現行の奨学金制度に問題があることは「第2回 教育経済学の基本 8.人的資本論とシグナリング理論の問題点」で指摘した。

今の日本に、経済的理由で大学に進学できない高校生がどの程度いるのかは定かではないが、矢野眞和氏は「日本の大学が直面している真の課題とは－教育財政の拡充と研究の基盤整備の必要性－」で、高校3年生2000名(有効回答数1728人)を対象に、2005年11月に進路希望を調査し、翌年3月末時点での進路決定を追跡調査した結果に基づき、中学校での成績が「中の下/下」と答えた生徒の46%が進学しているのに、「上/中の上」と答えた生徒の21%が大学に進学していないから、意欲も学力もあるにもかかわらず、家計の事情によって大学に進学できない高校生は、少なくとも21%の半分はいると指摘している。

株式会社ライセンスアカデミー進路情報研究センターが、全国の進路指導を担当する高校教員を対象に実施した『大学の学費に関するアンケート』の結果によると、希望進路の変更・断念の原因(複数回答)の第1位が「学力」(79.9%)で、第2位が「学費や入学後の費用」(76.3%)である。進学率90%以上の高校では「学力」が88.9%、「学費や入学後の費用」が49.2%、進学率30%未満の高校では「学力」が75.0%、「学費や入学後の費用」が88.0%であり、学費や学力に関する意識の差が歴然としている。また、「貸与奨学金や教育ローンを借りてでも進学した方がいいか」という質問に、「そう思う」(「とても」と「やや」の合計)と答えた割合は、進学率90%以上の高校では72.9%に対し、進学率30%未満の高校では38.1%と倍近い差がある。「貸与奨学金は返済が不安なので生徒に推薦できない」という質問に「そう思う」(「とても」と「やや」の合計)と答えた割合は、進学率90%以上の高校では19.1%に対し、進学率30%未満の高校では27.8%である。なお、高校教員の自由意見に「所得の低いご家庭が多い本校では、子ども手当も高校の無償化もあるいは奨学金も保護者の手に入ると生活費となり、子どものためには

使われない→格差の拡大へ」、「学費不足の家庭でありながら、携帯電話の使用料、高級車所有、生徒のアルバイト使途など支出の優先順位が違っている事が多いように思う」という指摘があることが注目される。

教育費の補助だけでは解決できない問題もある。福地誠氏は『教育格差が日本を没落させる』で次のように述べている。

昔のイメージでは、子どもが18歳になるまで、あるいは20歳になるまで、もしくは大学を出るまでは経済的な面倒を見てやり、そこでスパッと切り離して自立させる。それがあるべき親の姿だった。しかし現代では、それだと子どもが専門職に就くことはできない。大学院に進んだり、6年生の医学部や薬学部に入ったり、ロースクールに進んだり、会計スクールに入ったり、学生時代は長期化している。専門職に就くには、30歳近くまで経済的に面倒を見てくれる親がいるかどうか大きい。……奨学金とは要するに借金……将来の収入が確実に見込めない限り、借金までして勉強するのはハイリスクだ。そのリスクを本人だけで背負うのは大きなハンディであり、カバーしてくれる親の存在は圧倒的な優位につながる。今の日本社会は、子どもが何歳になるまで親が保護膜を張ってくれるかで階層化されている。下流は幼児期から張ってくれなかったり、15歳までだったりする。中流は22歳までカバーしてくれる親だ……。上流は30歳まで厚い保護膜の中で、自分の学業や趣味に専念できる。……これは先進国の多くに共通する現象だ。修学期間が長期化し、親の学費負担は重くなり、それでいて子どもの将来のリターンは小さくなっている。(P.102-104)

東京都内でも生活水準が低い地域にあるエンカレッジスクールを訪問して、校長先生に話を聞いたことがある。エンカレッジスクールというのは、……底辺校とか教育困難校と呼ばれていたものを再編成した。……「……この高校は、虫歯や歯の病気が平均的な高校生の二倍だそうです。小さいころから歯を磨くという習慣がないんですよ。……」……「とにかく問題は親です。ほったらかしというか、子どものことに興味のない親が多すぎます。……小学生の時から親が家にいないんです。……」「とにかく大変なのは授業料を取り立てることです。年間14万～15万の授業料を払わない家庭がすごく多いんですよ。……」「わたしの仕事はアルバイトの斡旋ですよ。生徒を呼んで、あんた学校やめる？ アルバイトする？ どっちなのって聞くんです。そしてバイト代は学校に直接持ってこさせます。家に持って帰ると、親にとりあげられちゃうからです。たぶん学校より取り立ての厳しいところ、たとえば消費者金融などに追い立てられている人が多いんでしょう。……」……親が子どもを喰う世界だ。こういった現実に対して教育は介入できない。校長先生は、生徒は変えようとしても、親は変えられないし期待もしていない。「学力と経済力の相関ですか？ それはあると思いますよ。はっきり出るでしょう。でも、根本は親の意識だと思います。親であるという意識のない親が多すぎて、そういった問題が噴き出しているのがうちの高校でし

よう」(P.121-126)

専門職大学院の増設や大学院重点化は、経済力に乏しい家庭の子どもを専門職から閉め出すことになる。奨学金の充実をはかるから良いとの主張があるが、「奨学金とは要するに借金……将来の収入が確実に見込めない限り、借金までして勉強するのはハイリスク」である。しかも、法科大学院のように作り過ぎて、司法試験合格率を下げ、司法試験合格者数を増やし過ぎて、弁護士の収入が減少する、あるいは、博士課程の学生数を増やし過ぎて、高学歴ワーキングプアを大量に生み出すというようなことを行い、大学院に進学することをハイリスク化し、教育の収益率を低下させている（「第6回 教育における需要と供給のミスマッチ（その1）参照」）。これでは、経済的な余裕がある家庭の子どもしか、大学院に進学しないことになってしまい、専門職のレベルは低下する。その専門職に本当に大学院教育が必要なのかを客観的証拠に基づいて検証すべきである。

差別感をなくせば平等になるという教育における形式的平等主義（「4.環境の違い→努力差→教育格差」参照）が教育期間の長期化を招いて、経済的格差による教育格差を拡大させている。一定の知識を身につけるには、一定の年数が必要であるというのは非現実的な仮定である。個人の能力差によって、習得に必要な年数は違ってくる。そのことを素直に認め、短期間で履修できる学校やコースの設置、飛び級などにより、能力が高い者の教育年数を短くすれば、教育に必要な費用が減り、経済的格差による教育格差を縮小させることができる。形式的平等が実質的不平等を招いていることに気付くべきである。

形式的平等が実質的不平等を招いてしまった事例には、公立高校の小学区制、総合選抜などにより公立進学校をつぶし、私立の中高一貫校の繁栄を招き、経済的格差による教育格差を拡大してしまったというものもある。

お金がないのに、ギャンブルにはまったり、ブランド品を買いあさったりして無駄づかいし、大酒を飲んで子どもに暴力をふるい、挙げ句の果てに、闇金融に追い立てられ、夜逃げするというような親を持つと、いくら奨学金や子ども手当を出しても、教育費を無償化しても、子どもは救われない。奨学金や子ども手当を自分の娯楽や借金返済のために使ってしまう親もいる。「親であるという意識のない親」からは親権を剥奪したり、児童相談所で保護したりする必要があるが、これらの制度はうまく機能していない。所得が完全に平等な社会を作っても、無駄づかいを止めることはできないから、この問題は解決できない。結局、政府が、大学卒業まで、このような子どもの世話をする必要がある。「7.「機会の平等」は実現不可能」でも述べるように、親が子どもを育てるといふ家族制度を否定しない限り、格差を無くすことはできない。

## 2. 文化的格差→教育格差

第一段階における議論には、教育機会を拡大し、機会均等をはかれば、社会の平等化

を推し進めることができるという素朴な期待がある。しかし、この期待は、現実によって裏切られる。刈谷剛彦氏は『大衆教育社会のゆくえ』(P.44-51)で次のように述べている。

教育の機会を拡大することによって、社会の平等化を推し進めることができる。こうした期待が、……1960年代の各国の教育拡大政策の背後にあった。しかし、教育機会の拡大と平等化を推し進めた政策は、実際には十分な効果を上げられずに、教育に向けられた期待を裏切っていく。……教育による社会の平等化という試みの失敗を背景に、欧米の社会学者たちは、教育と社会階層の問題……に目を向けていった……教育の無力。その点を明らかにした研究の出発点は、1960年代半ばの、J・コールマン(1966)や70年代初頭のC・ジェンクス(1972)の研究に求めることができる。コールマンは、……「教育機会の均等調査」を実施し、学校における成功、不成功が、教育につぎ込まれた資金や施設・設備、教師の質、カリキュラムといった教育環境を左右する要因によってよりも、むしろ生徒の人種や階級などの社会的背景によって大きく制約されることを明らかにした。また、ジェンクスは、……教育が社会の平等化に寄与する影響力の弱さを証明してみせた。たとえ同じ年数だけだれにでも教育を受ける機会を与えたとしても、そのことによって縮小される社会の不平等(たとえば所得格差)は、ほんのわずかにすぎないことを明らかにしたのである。しかも、教育における成功そのものが、子どもたちの社会的背景によって強く規定されていた。遺伝による影響をまったく無視したとしても、どのような家庭で育つかによって、知能テストの得点には不平等が生じてしまう。……なぜ、労働者階級や人種的マイノリティの子どもたちは学校で優れた成績をあげられないのか。こうした問題に取り組んだ欧米の社会学者たちが第一に目を向けたのは、家庭や地域社会で伝達される文化の差異である。……大きくは「文化的剥奪」説としてまとめられるこれらの研究では、家庭的背景によって伝達される文化の質が異なることが、学校で発揮される能力に関係していることを見いだした。……イギリスにおいては、階級によって生徒の学業達成が異なるのはなぜかを解明するために、言語使用の様式に着目する研究が行われた。……イギリスの社会学者B・バーンステイン……によれば、ミドルクラスの子どもたちは、言葉による表現を行う場合に、表現の対象と自分とを相対化することができる、従属節や副詞節を用いた複雑な構文を使える、形容詞や副詞の語数が多い、などの特徴を示す。こうした言語使用のルールは精密コードとよばれる。それに対し、労働者階級の子どもたちは、対象と自分とを同一視しがちであり、表現の方法も単純な「限定コード」を使う。精密コードとは、学校での学習にとって適合的な言語使用のルールである。それに対し、限定コードは、学校で成功するためには不利となる言語使用のルールである。……アメリカにおいても、イギリスにおいても、階層分化の差異に目を向けることで、社会階層によって異なる子どもたちの学校での成功、失敗の原因を探

ろうとした。このようなアプローチを可能にしたのは、いずれの社会においても、社会階層の文化的な特徴が、他と区別できるものとして、とらえやすく、目につきやすかったからにはほかならない。

このようにして、第二段階では、イギリス、アメリカ、フランスなどで「文化的剥奪」、  
「文化資本」の議論が展開された。「文化的剥奪」、「文化資本」の議論を大まかに説明すると、学校教育は中流階級の文化（ものごとの捉え方、価値観、言葉の使い方、生活習慣、趣味、嗜好など）や人種的マジョリティの文化に適合的なものとして組み立てられているために、それとは異なる文化を家庭や地域社会で身につけている労働者階級や人種のマイノリティの子どもは学校教育にうまく適応できず、低学力となる場合が多いということである。この議論の背景には、欧米における文化と階級の独特な結びつきがある。岡田斗司夫氏は『オタク学入門』（P.338-344）で次のように指摘している。

メインカルチャーとはおおざっぱにいうと、アート、文学、科学、歴史、クラシック音楽といったアカデミックかつクラシックなもの。もっと平たくいうと大学で昔から研究してきたようなもののことである。……ヨーロッパ文化圏では、メインカルチャーを身につけるのが当たり前である。それが出来ない人は「クラスが低い」とされてしまう。……メインカルチャーのルーツは、キリスト教とギリシャ哲学だ。まずギリシャ哲学の頃からの伝統的考え方として「世の中のすべてには理由がある。物事はすべて論理的に存在していて、人間が努力して賢くなればあらゆる事は解明できる」という思想がある。その考え方をキリスト教が少しアレンジする。世の中には、はっきりとした秩序（コスモス）の部分と、はっきりしない無秩序（カオス）の部分がある。コスモスが神の世界、カオスが悪魔の世界だ。……中世の城塞都市には、必ず町のど真ん中に教会がある。これは、……鐘の聞こえる範囲はコスモスで神の世界、聞こえない森の中はカオスで悪魔の世界、ということなのだ。……もともと科学は森とか海とか植物とか、そういった魔の世界を研究してその中に秩序を見つけ出してコスモスにする、という行為だったのだ。……こうやって生まれた科学を中心とするメインカルチャーは秩序だっていること、論理だっていることがもっとも大切とされる。それに対し、自分たちの感情のまま振る舞う子供は、存在自体カオスであって、良くない状態なのだ。早くコスモスな大人に成長すべき存在と考える。イギリス人が子供を他人である乳母に預け、しつけさせるのも子供の無秩序な行動は「悪」と考えるメインカルチャー的価値観から来るものだ。さて、乳母を雇って子供をしつけさせる、なんていうのはある程度お金持ちじゃないと出来ない。メインカルチャーとは、そういった人たちを対象とし、そういった人たちに支えられてきた文化だ。いい換えれば「メインカルチャーを身につけているものは、育ちが確かなちゃんとした人」ということになる。つまり、この文化を理解している、ということが「階級」の証となるの

だ。

また、山本雅男氏は『ヨーロッパ「近代」の終焉』で次のように指摘している。

イギリスには、“Children should be seen, but not heard.”という諺がある。「子供は見る者であって、その言葉に耳をかすものではない」という意味だ。ここには、彼らの子供に対する考え方が端的に表れている。つまり、子供は未熟なものというだけでなく、不完全なもの、足らざるものという意識である。……大人のもつような理性をいまだもっていないものとするのであろう。だからこそ、大人の理性を育むためにも、子供を教化、訓育して理性化する教育が必要だと考えるわけだ。(P.135-136)

子供のもつ本質は、大人の秩序性から自由なところにあり、それ自体が反秩序的なものとして存在するのだ。たとえば、幼児が食事をするとき、口の周りや衣服を汚しながら食事するが、これを汚いといって見とがめるのは大人の感覚であって、子供は汚いという意識をもっていない。汚いという感覚は、排除の論理に立った、すぐれて大人の感覚なのである。……「近代」の制度的な教育は、子供から反秩序的な本質を奪うことを到達目標にし、子供の側も秩序のなかに自分の位置を見出すことに腐心してきたのではなかったか。(P.140-141)

欧米には、理性ある人間は神によって秩序づけられた世界（コスモス）の中で生きなければならないから、コスモスの化身であるメインカルチャー、ハイカルチャーを身につけなければならない、メインカルチャーを身につけず、悪魔の世界であるカオス（無秩序）の中で生きる子どもや労働者階級や移民は野蛮な人間であるという排除・差別の論理があるということである。学校は、カオスの中で生きる子どもにメインカルチャーを与えて、コスモスの中で生きる大人に改造する場なのである。これが教育の「社会化」機能である。この背後には、中流階級が社会の支配権を握るために、自分たちの文化こそが正統的な文化、メインカルチャーであり、コスモスに支えられた優れた文化であると決めつけ、学校でメインカルチャーを教養として教えることによって、学歴による選抜を中流階級に有利なものにしようとした戦略がある。葛藤理論が指摘するように、支配的な階級である中流階級が自分たちに有利なように学校や職業での能力を定義して、それによって仲間内で有利な地位を独占しようとしたのである。

欧米では、この戦略が成功し、学校では、職業に必要な実際的な知識・技能を教えることよりも、メインカルチャーを身につけさせる、つまり、教養教育が重視され、教育で高い教養を身につけた者が尊敬される社会が生まれた。荻谷剛彦氏は『大衆教育社会のゆくえ』（P. 124-125）で、次のように指摘している。

教育が直接的に職業的な能力にかかわらなくとも、それが教養を高めるものである

という点に照らして、高度な教育を受けた人びとは十分尊敬に値するとみる教養主義的な見方が強い社会もある。このような社会の場合には、そもそも、学歴が職業的な実力と一致すべきであるという見方は、強力な支持を得ない。たとえば、イギリスのように、教養教育を重視する社会では、高い学歴を持ったエリートたちが、職業に直接役立つ知識や技能を備えていないからといって、その地位を疑われることはあまりない。……韓国でさえ、……高学歴者は、実学より虚学に価値をおく儒教的教養主義に守られているという。それゆえ、韓国では、学歴の高い人びとに対する敬意の念は、日本以上に強いといわれるのである。

歴史的に見ると、教養というものは、特定の時代の特定の社会の支配層が、自分たちの生活様式に特徴的なものを教養であると決めつけ、そのような生活様式を持たない被支配層との差別化をはかるための手段であった。欧米の中流階級は、近代化後も、この戦略を踏襲しているのである。マックス・ウェーバーは『支配の社会学 I』(P.139)で、次のように指摘している。なお、「ヘル」とは、「自分たちが要求した実際に行使している命令権力を、他の指導者による授権から導き出すのでない単数または複数の指導者」(P.27)、つまり、支配者のことである。

封建制的・神政政治的・家産制的支配構造において、イギリスの名望家行政において、昔の中国の家産制的官僚制において、ギリシアのいわゆる民主制のデマゴグ支配において、……教育の目標と社会的評価の基礎とは、「専門人」であったのではなく、……「教養人」……であった……「教養ある」ものとみなされた生活様式の特質が教育の目標なのであり、特殊な専門訓練が教育の目標であったのではない……それぞれの場合に応じて、騎士的または禁欲的教養、または（中国におけるごとく）文人的教養、または（ギリシアにおけるごとく）体育的＝音楽的教養、……あるいは……アングロサクソンのジェントルマンとしての教養を身につけた人、いずれにせよ「教養ある」人というのが、教育の理想であったのであり、この理想は、支配の構造とヘル階層に所属するための社会的諸条件とによって、規定されたものである。支配層を支配層たらしめる資格は、「教養資格」……をより多くもっているということにもとづいていたのであり、……専門知識の量にもとづいていたのではない。……教育制度の基礎に関する現在のあらゆる論議の背後には、古い「文化人」タイプ対「専門家」タイプの闘争が、何らかの決定的な箇所には伏在している。

このような中流階級の戦略に対して、労働者階級はカウンターカルチャー、サブカルチャーなどで、カオスを賞賛し対抗している。また、カオスの中に生きる子どもという考えに対抗して、子どもには自らコスモスを形成する力が備わっているとする構成主義に基づく学習理論や児童中心主義的な教育思想が生まれた。

しかし、このようなコスモス対カオスという見方は表層的なものである。コスモスの背後には「文字の文化」による「人間の生活世界を記号によって抽象化した理論モデルを用いた」「状況依存的ではない、形式論理的な」認識と思考（抽象的思考）があり、カオスの背後には、「声の文化」による「人間の生活世界に密着した」「状況依存的であって、抽象的ではない」認識と思考（具体的思考）がある（「第4回教育の経済効果（その2） 3. 学校における「社会化」の隠された実体」参照）。欧米人は「抽象的思考」の産物（ルールに従い規則的に動く人間・社会・組織、人工的な建造物・機械、科学理論など）に囲まれた人工的な世界（マックス・ウェーバーが言う「合理性の鉄の檻」、養老孟司氏が言う「脳化社会」、「第12回 暗黒の情報社会と教育」参照）、それも中流階級に都合良く作られた世界をコスモスであると勘違いしているのである。「抽象的思考」を使って、別のコスモスを作ることも可能であることに気づかず（相対主義者など、一部の人は気づいている）、自分たちの作ったコスモスを絶対視してしまっているのである。そして、学校教育は、子どもにコスモスを与える場というよりは、「第4回教育の経済効果（その2） 3. 学校における「社会化」の隠された実体」と「第8回能力の個人差 10. 認知的文化の差—声の文化と文字の文化」で論じたように、「具体的思考」を「抽象的思考」に改造する場なのである。「抽象的思考」に親和的な中流階級の文化を身につけた子どもが有利となり、「具体的思考」に親和的な労働者階級の文化を身につけた子どもが不利になっているのである。

メインカルチャーが欧米の中流階級の生活様式の反映である以上、メインカルチャーの全てがコスモスであるはずはなく、夾雑物であるカオスを含んでいる。例えば、クラシック音楽や古典文学には非論理的、感情的な要素もあり、コスモスの固まりだとは思えない。そもそも、理性、論理だけで音楽や文学を創作できるはずがない。しかし、このことは隠され、学校教育ではメインカルチャーのコスモスの部分（学問化された部分など）だけが教えられている。また、学校教育は、「具体的思考」を「抽象的思考」に改造する場であることが理解されていない。このことが不幸を生み出す。労働者階級の子どもは、学校で「抽象的思考」やメインカルチャーのコスモスの部分を身につけることはできても、メインカルチャーのコスモスでない部分（夾雑物）を身につけることは困難である。夾雑物は家庭や地域社会での経験で身につくものだからである。メインカルチャーの夾雑物を身につけている中流階級出身者と、夾雑物を身につけていない労働者階級出身者とは、同じ大学の出身者でも相容れないのである。表面的には、同じように「抽象的思考」をしても、心の根っこにあるもの（感情的なもの、本能的なもの）が違うのである。その結果、「人間には自分と似た人間を高く評価するくせがある。これもごくあたりまえの心性であるが、選抜システムでは大きな偏りを発生させる。選抜する側が一つの文化的特性を共有している場合、選抜される側に同じ文化的特性をもつ人間がいると、その人を全員が高く評価してしまうのである」（佐藤俊樹著『不平等社会 日本』P. 113）という効果が働き、労働者階級出身者は不利となる。この場合の「文化的



特性」とは夾雑物のことである。また、労働者階級出身者が高学歴を得たということは、学校でメインカルチャーを教養として教えることによって、学歴による選抜を中流階級に有利なものにしようとした戦略がうまくいかなかったという証であるので、排除しようとする。その結果、中根千枝氏が『タテ社会の人間関係』（P.102-103）で指摘するように、「東大出身ということと、オックスフォード出身ということとは決して同じ意味をもっていない。前者においては、魚屋の子だろうが、水飲み百姓の子だろうが、実業家の子だろうが、大学教授の子だろうが、東大というものを通過することによって、同列にたちうる。教育機関というものが、社会層の差をなくすか、ミニマムにするほどの機能を日本ではもちうる……後者においては、ジェントルマンの子弟はだいたいオックスフォードに行くから、オックスフォードの特色が出るのであって、労働者の息子はオックスフォードに行っても、下層出身者ということは一生ついてまわる。すなわち、教育機関というものは、社会層の差に対して、さして機能を発揮しないのである」ということになる。

日本人は、理性ある人間は神によって秩序づけられた世界（コスモス）の中で生きなければならないというような考えを元々は持っていなかった。岡田斗司夫氏は『オタク学入門』（P.350-351）で次のように述べている。

日本文化で「子供」とは決していけない存在ではない。むしろ、子供のままでいることは純真な心を失わないすばらしいことと考えられる。……子供はコスモスの世界を揺るがすカオスではない。同じく町外れの森も、決して「悪魔の領地」ではない。森も、子供も、それら全ては「あるがままの自然に近い状態」として肯定的に捉えられているのだ。

公文俊平氏は『情報文明論』（P.283-284）で次のように述べている。

日本人は、“いま、ここに”ある現象世界が、そのまま絶対の实在だと考える。いいかえれば、現象の“背後”にある、あるいは、現象を“超越”している“形而上”の实在を認めない。……主客は合一し、物心は一如であり、事実は同時に価値である。……この世界は、「つぎつぎになりゆくいきほい」（丸山真男著『忠誠と反逆』）にしたがって、それ自体として推移し変化しているだけであって、その過程を支配し決定している自然法則のようなものがあるわけではない。……日本人の思考においては、……まず全体を直観的・情緒的に判断し把握したうえで、おもむろに理性（理＝ことわり＝事割り）をはたらかせてその分解・分析にとりかかる。……しかし、理性的分析は、いわば仮の手続きにすぎず、その結果も相対的なものであって、それに信を置きすぎるのは危険である。もともと、抽象的で論理的な“理屈”よりは、現象世界の“現場”にある具体的な事物に関する情報や、自分自身の個別的な経験を重視するのが、

日本的な思考なのである。もちろん、だからといって一切の理論が無用ということにはならない。ただ、その有用性には限度があるので、そのことをよくわきまえて、いろいろな理論は適当に利用すればよい。それも理論から出発して演繹するというよりは、現場の経験や“実感”を根拠づけたり一般化したりするために、もっとも都合のいい理論をかりてくればいいのである。

諏訪哲二氏は『プロ教師の見た教育改革』（P. 140）で次のように述べている。

私たちはドライに議論をする技術と覚悟を欠いている。いつも心情や気分や情緒が入ってきてしまう。ひとやものや、そして己を突き放して（距離をおいて）眺めることのできない思想風土なのであろう。日本語ももともと、目的語を必要とする他動詞的なものを決定的に欠いている。何でも自動詞（＝になる）的に表現する。教師の会議でも、意図や目的や責任を明確化するために他動詞的に喋ると嫌がられる。……みんなの気持ち（気分）を傷つけないように自動詞的に（誰かが何かをするのではなく、自然にそうなるように）しゃべる人が好かれる。

「抽象的で論理的な“理屈”よりは、現象世界の“現場”にある具体的な事物に関する情報や、自分自身の個別的な経験を重視する」「いつも心情や気分や情緒が入ってきてしまう。ひとやものや、そして己を突き放して（距離をおいて眺める）ことのできない」というのは「声の文化」的な特徴である（「第4回 教育の経済効果（その2） 3. 学校における「社会化」の隠された実体」参照）。日本人は未だに、アニミズム的な宗教的世界観にとらわれ（「第13回 日本の特殊性と教育 2.呪術的世界観」参照）、「声の分化」的な思考様式を色濃く残しているのである。「声の分化」の「具体的思考」が支配的な日本においては、「抽象的思考」を得意とする人間は、「抽象的思考」を現実社会に適用することに困難を感じる。自分の属する集団の情緒的な一体感を壊すからである。「智に働けば角が立つ」（夏目漱石著『草枕』）、「論理は、本や講義のなかにあり、研究室にあり、弁護士の仕事のなかにあるのであって、サロンや喫茶室や、食卓や酒席には存在しない。そうしたところでは、論理をだせば理屈っぽい話としてさけられ、理屈っぽい人は遠ざけられる」（中根千枝著『タテ社会の人間関係』P.182）のである。その結果、彼らは現実から遊離した観念の世界に逃げ込み、同じ理論を信じる小集団内で「抽象的思考」を競い合うことで満足を感じようとする。江戸時代における和算がその典型であり、現在では、学者やオタクにそのような傾向が強い。アニメやテレビゲームは感情移入的、状況依存的な「具体的思考」の産物であるように見えるので、オタクが「抽象的思考」をしていると言うと奇異に感じるかもしれないが、実はアニメやテレビゲームは人気作品を分析して、人気の出る要素や組立て方を抽出し、それを模倣しつつ変形したもので、「抽象的思考」による分析の対象となるのである。アニメを見るだけ、テレビゲー

ムをするだけではオタクと言えず、「頭の中に知識が熟成して友達に、彼なりの……アニメ論・演出論を語りはじめたとき、彼は自他ともに認めるオタクになったと認定される」（岡田斗司夫著『オタク学入門』P.50）。

抽象化のあり方が、欧米と日本では違うと考えた方が良いのかもしれない。欧米では、「現象世界」を抽象化して、「現象の“背後”にある、あるいは、現象を“超越”している“形而上”の実在」である一般的・普遍的な理論モデルを作ろうとする。日本では、「現象世界」を独特の方法で抽象化して、「現象」を「見立て」た作品を作り、その独特の方法が分かる（「粋」である）仲間内で鑑賞し、「見立て」が分からない人を「野暮」と呼び排除する。岡田斗司夫氏は『オタク学入門』で次のように述べている。

抽象化というのは要するにデフォルメと省略のことだ。自分の印象深いものをデフォルメする。その他の部分は省略、もしくは縮小する。（P.141）

日本の文化には「見立て」という言葉がある。たとえば日本庭園の大きい石を島に「見立て」たり、玉砂利を波に「見立て」たりする。……縁側からながめたとき、島が美しく並んで、「蓬莱神仙島」だ、と見立てたりする。……茶室、なんてのは全てが「見立て」のカタマリだった。……自宅の離れの一室を中国の山奥に見立てて遊ぼう、という大人の「ごっこあそび」だ。（P.142-143）

どんなにいいキセルも、見方のわからない人にはただのキセルでしかない。せいぜい変わった柄とか、売値が高い、というのがわかる程度だ。こういう人は野暮と呼ばれて嫌われる。これに対して、わかる人はキセルからいくつもの発見をする。たとえば……「この模様はよく見たら千鳥じゃないか。なるほど、タバコの煙を洲浜に見立てて、その上で千鳥か」とかの作者側の暗号をわかってくれる客を「粋」と呼ぶ。作る方も粋な人ならわかってくれるだろうと、と考えて作る。見る方もそれに応える。……こういう作り手と受け手のキャッチボールのような関係が日本文化の特徴だ。（P.354-355）

日本では、抽象化能力が狭い仲間内の遊びの世界に閉じこめられ、一般化・普遍化できなかったことと、「現象の“背後”にある、あるいは、現象を“超越”している“形而上”の実在を認めない」ことから、「現象の“背後”にある」ものを暴き出す、一般的・普遍的な科学を生み出せなかったのではないだろうか。また、「粋な」仲間だけが分かる独特な方法で抽象化するから、仲間ではない「野暮な」人間とは話が通じなくなる。「学者や知識人はグループをつねに構成し、その中で独特な発想法や用語を使用して、第三者や他のグループとは同じ分野の専門でありながら、さっぱり意志が疎通せず、ディスカッションが不可能だったりする」（中根千枝著『タテ社会の人間関係』P.53）ということになる。

日本古来の宗教的世界観では、この世の全ての「モノ」（人間、動物、物質、集団、組織等）は、それぞれの魂を持ち、その「本分」（本来そなわっている性質・能力）をおのずから働かせることによって、この世は調和を保っていると考えるので（「第13回 日本

の特殊性と教育 3. 呪術的世界観」参照)、コスモスとカオスというような区別をしない。そのため、メインカルチャー・ハイカルチャーとカウンターカルチャー・サブカルチャーの対立の底にある思想を理解できない。また、特定の理論を絶対視するようなことをせず、理論は単なる道具に過ぎないと考えているので、何の役にも立たない教養に価値を認めようとしなない(価値を認めるのは「粹な」仲間だけである)。その意味では、カウンターカルチャーやサブカルチャーに親和的である。さらに、日本では、集団の一体感を保つために同調せよという圧力が強いので(「第13回 日本の特殊性と教育 3. 「空気」の支配—多数派への同調」参照)、教養をひけらかし、理屈をこねるような人間は鼻持ちならぬ奴として排除(村八分)される。その結果、日本では、階級、階層による文化の違いが見えにくくなっている。

日本では、「抽象的思考」に親和的な文化と「具体的思考」に親和的な文化の違いがあることが隠されおり、表面的な調査では見えにくくなっている。例えば、「バーンスティンの社会言語的研究の命題を日本で検証しようとした中野由美子は、日本においては、子どもの言語使用は親の職業(これは、バーンスティンの研究で「階級」のインデックスの1つに用いられている)による違いよりも、地域による差が大きいと結論づけている。つまり、「階級」あるいは職業を主軸としてとらえる「階層」をもとにして「階級文化」とか「階層分化」の存在を想定し、それによって教育達成の差を解明することが、日本ではできないのである(柴野昌山・菊池城司・竹内洋編『教育社会学』P.156)というような見解を導くことになってしまう。

ことばの表面的な表現方法の違いが問題なのではなく、表現方法の裏に隠された思考方法が問題なのである。中野由美子氏は「階層と言語」で、T小学校(N県の2級へき地校、山間で80世帯が零細農業を営む共同体的村落)の5年生とH小学校(東京近郊の新興住宅地)の5・6年生の作文を比較して、「僻地T校では、状況を自己の感情や考えというフィルターを通さず、状況を生起する順にコピーしていくという方法で文が組織され、ことばの組立が目前の状況から遊離し、遂行される度合、すなわち抽象度に欠ける。…近郊都市H校では、状況把握の主体を明確にさせ、事物の態様・自己の感情をあらゆる語らいに関心を集中しながら、文を多様なやり方で論理的に接続する手段をもち、その表現の広がり、時間的空間的に現在の状況を越える可能性をおびている」と指摘しているが、これは、T小学校では「声の文化」の「具体的思考」が根強く残っており、H小学校では「文字の文化」の「抽象的思考」に変化しつつあることを示している。また、中野由美子氏は、C県下の近郊都市のF小学校5年生(中間層(ホワイトカラー)の子どもと労働者層の子どもを比較)、T小学校6年生の話しことばの違いがあるかを調査して、「話しことばでは有意差は少ないが、中間層と労働者層間には、語いの選択と構文の複雑さ、ないし内容的な差違があり、さらには話すという状況に対する言語的・心理的な抵抗度が違うといえよう」と結論づけている。「有意差は少ない」というのは、言葉の使い方の表面的、数量的な比較(使用された語句数と除外された語句数、総使用語句数に対する

各品詞数の割合、動詞の使用数に対する従属節数の割合等)の結果に過ぎない。中間層の子どもでは「くり返し、聞き返しなどが多い」というのは「声の文化」的な特徴である。「語らいの選択と構文の複雑さ、ないし内容的な差違」を注意深く、質的に調べれば、違いが見えたはずである。中野由美子氏も指摘しているように「階層差は、使用されることばの数量というよりもむしろ質的差違に帰着する。つまり語い選択の範囲とその組織化の方法の相違」なのである。そもそも、話しことばでは、書きことばほど、「抽象的思考」と「具体的思考」の違いは明確には現れない。F小学校でも作文を質的に調査すれば、中間層の子どもと労働者層の子どもの違いが明確になったのではないかと思われる。したがって、中野由美子氏の研究結果を「社会階層差よりも地域差のほうが、日本では、言語使用における重要な差違として発見された」(荻谷剛彦著『大衆教育社会のゆくえ』P.52)と解釈してはならない。

荻谷剛彦氏は『大衆教育社会のゆくえ』(P.204)で、「日本でも、家庭で伝達される文化資本が、学校での成功を左右していることはたしかである。文字や数字などの記号を操る能力、丹念に論理を追う能力、ものごとをとらえるうえで具体から抽象へ飛躍する能力。これらの能力の獲得において、どのような家庭のどのような文化環境のもとで育つのが、子どもたち間に差異をつくりだしていることは否定しがたい。そして、こうした能力の違いが学校での成功と失敗を左右するであろうことも容易に想像できる」と指摘している。「文字や数字などの記号を操る能力、丹念に論理を追う能力、ものごとをとらえるうえで具体から抽象へ飛躍する能力」とは「文字の文化」の「抽象的思考」を行う能力のことである。「第8回 能力の個人差 10.認知的文化の差—声の文化と文字の文化」で指摘したように、日本でも、「声の文化」に適合的な育て方をしている家庭と「文字の文化」に適合的な育て方をしている家庭の差があり、この育て方の差が、一般知能の差を生み出し、学力差につながっているのである。

お茶の水女子大学・Benesse 教育研究開発センター共同研究『教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書』は、国語と算数の学力が高い子ども(小学校5年生)の家庭では保護者が知的な活動(ニュース番組を見る、本がたくさんあるなど)を多く行い、保護者からの知的な働きかけが多く(小さいころ絵本や本を読んでもらった、博物館や美術館につれていってもらったなど)、保護者との会話(特に、一日の出来事を話す、学校での勉強について話をすること)が多い傾向にあることを示し、「「階層」→「家庭環境・生活」→「学力」といった影響関係があることを示唆する結果が確認できたといえよう。しかしその一方で、重回帰分析の結果、母学歴や父職業といった階層変数を統制しても、親の子どもへの働きかけや子どもの家庭学習は学力に有意な影響を及ぼしていることも明らかになった」と指摘している。

日本の学校で教え込まれる文化は、欧米から輸入されたメインカルチャーを主とする文化であり、高学歴者ほど、学校などで欧米のメインカルチャーを多く身につけている。つまり、日本では、学歴によって文化に差があり、高学歴者の家庭ほど、学校教育に適

合的な文化を持っていることになる。しかし、学校教育で身につけた文化（近代的・科学的世界観）と日本の伝統文化（日本古来の宗教的世界観）が融合せず、個人の中で分裂している。諏訪哲二氏が『プロ教師の見た教育改革』（P. 170）で指摘しているように「ジャパンローカルの教師たちは頭は西欧近代的で、身体性は日本土着的である……もちろん、頭と言ってもその総体ではなく、生徒に話すために言葉で構成された上澄みの部分だけである。教師の頭は教室で喋っているときは西欧近代的で、職員室で世間話をしているときはジャパンローカルのである。……頭は西欧近代的で身体性は日本土着的という教師の分裂したスタイルは、もちろん教師以外の知的主体にもあてはまる」のである。

日本の伝統文化がかつて持っていた階級性（あるいは階層性）は批判され、ほとんど失われてしまった。その結果、日本の伝統文化の面では階層による違いはあまりないが、欧米のメインカルチャーの面では学歴による違いが大きいというねじれた状態が生じている。このねじれた状態の中で、集団の一体感を保つために同調せよという強い圧力がかかってくると、日本の伝統文化の庶民性の面を強調し、欧米のメインカルチャーの面を隠すことになる。橘木俊詔・八木匡著『教育と格差』（P. 80）が指摘しているように、「クラシック音楽や古典文学を好み、高尚な趣味に生きる人よりも、カラオケ・バー、プロ野球観戦で同僚社員と親しく交流できる人の方が企業での出世に有利になっている」のである。また、中根千枝氏は『タテ社会の人間関係』（P. 53）で、タテ社会である日本の「人間関係の特色は、地域性が強く、直接接触的であるということである。地域性が強いということは、その集団ごとに特殊性が強いということと、一定の集団構成員の生活圏がせまく、その集団内に限定される傾向が強いということである（……自分たちの世界以外のことをあまり知らない、あるいは、他の世界の存在をあまり知らず、それになれていないということである）」であると指摘している。自分の属する集団の文化しか知らず、他の集団が違った文化を持っているということを理解できないので、文化の違いに気づかないのである。これらの結果、日本では、文化の階層差が目につきにくくなっている。

しかし、日本の伝統文化（日本古来の宗教的世界観）の影響力が弱まり、欧米のメインカルチャー（学校等によって伝えられる）とサブカルチャー（マスメディア等によって伝えられる）の影響力が強まりつつある。三浦展氏は『下流社会』（P. 180-184）で、若い世代には「下流化」傾向（中流が「上」と「下」に二極化する傾向）があり、「下流」（「中の下」と「下」）の男性は「パソコンの前に座って、ペットボトルの飲料を飲み、ポテトチップスを食べながら、インターネットをしたり、ゲームをしたり、携帯でメールを打ったりしている」、「下流」の女性は「歌ったり踊ったり、絵を描いたりしている」「下」ほどサブカルチャー的な趣味に自分らしさを見いだす」と指摘し、吉川徹氏は『学歴分断社会』（P. 162-164）で、「『下流社会』における「下流は……」という部分をすべて「高卒層は……」と「一括変換」していけば、三浦氏の議論の骨組

みがみえてくるのではないか」「こんにちの若年非大卒層のほぼ半数が自分は「下流」だと思っていて、それは大卒層の2倍の高い確率なのです。結果として「下流」の7割が非大卒層で占められているわけです」「「下流」の指標である階層帰属意識を決める要因は、経済的な豊かさと学歴であり、とくに学歴の影響力はこの30年間一貫して増大していることが分析によってすでにわかっています」と指摘している。

また、永山彦三郎氏は『現場から見た教育改革』（P. 114-120）で次のように述べている。

70年代より始まり80年代に隆盛をきわめた暴走族文化、そして70年代以降連続したサーファー文化、ディスコ文化、さらに80年代後半に現れたチーマー文化が渾然一体となって90年代から現在に至るヤンキー文化を形作ったといえる。……そうしたさまざまな不良文化に染まった者がいまや、30代、40代である。親の世代だ。……特に地方の親の世代で、いわゆる不良文化に対する親和性が高まっていて、というより学校が範とするエスタブリッシュメント的文化に対して、暗黙のうちに反発する文化に親たちもすでに巻き込まれている。するとその子どもたちにとって、不良文化はまさにおとうちゃん、おかあちゃんの生き様そのものとなる。そうしていつしか勉強に代表されるエスタブリッシュメント的な正当文化に背を向ける子どもたち、いわゆるヤンキー二世となっていく。この事態は、都会で子どもをせっせと私立に通わせ、ゆくゆくは自分たちの階層に入れようとしている現在のエスタブリッシュメントたち、およびそうしたものに憧れる予備軍たちの城壁作りとパラレルな関係にある。つまり、社会の二極化だ。あるいは階層の分化だ、あるいは地方的なるものと都市的なるものの分化とでもいえばいいのか。

それは言い換えればガストの断絶だ。そしてホテルオークラの断絶だ。……ガストは比喩だ。……地方的なるもの、あるいはヤンキー的なるものの総体である。……ホテルオークラ……も……比喩だ。東京的なるもの、あるいはエスタブリッシュメント的なるもの、といいかえてもいい。……なぜ、人は高い金を払って私立に子どもを通わせるのか。それはたぶん子どもの人生に、ということは自分の人生にガスト的なるものを持ち込ませないための城壁作りにほかならない。と同時に実はガスト的なるものもそれに呼応して変質している。自分の人生、ガストでいいじゃないか、という開き直り、あるいは生活実感がある層に確実に広がっている。……その志向の奥には「どうせ頑張ったって」というあきらめがある。

こうした状況が魂の不在を招いた。そしてそこに闇が広がった。あきらめと逃走という闇が、である。このあきらめと逃走が教育の分野で表出したのが、学びからの逃走現象であり、子どもたちのヤンキー化現象である。……東京の私立で小さい頃からはがが勉強している子にはかなわない……もともとそんなに教育熱心じゃない家庭に生まれたことが悪いのだから、勉強してもしかたないよね……勉強したってたいし

た人物になれないし、いい職につけない……すでに生まれた場所、生まれた家庭によって勝負はついているのだ。そのあきらめの感覚が、日本の大都市圏を除くほぼ全域を支配している。そしてそれこそが子どもたちが学びから逃走している一番の原因なのだ。……ここでいう「地方」はもちろんメタファーだ……だからこうした現象はすでに全国区である。

福地誠氏は『教育格差が日本を没落させる』（P.110-114）で次のように述べている。

少し前に知人に聞いた話だ。彼は……念願の一戸建てを購入した。……新しい路線が開通して便利になったところだという。……そこは子どもの教育環境としてはよくなかったという。もとの住人はヤンキー系ばかりで、彼のようなリーマン系はものすごく少ないのだ。……そこでは公園デビューまで階層化しているという。ヤンキー系のヤンママばかりが集まる公園と、リーマン系のお母さんが集まる公園に、はっきりと分かれている。……「夕方になると、地元の人たちが駅の周辺にたむろしてるんですよ。その雰囲気もう、子どもを大学に行かせるような感じじゃないですもん。だから、教育環境としては大失敗で、中学受験させて脱出させるしかないと思ってます」 知人はそんなふうに言う。自営業者と被雇用者、すなわちヤンキー系とリーマン系は、日頃の行動習慣も違っており、とくに子育てになると価値観の違いが大きくなる。単純化するなら、“反学校”と“従学校”だ。ヤンキー系は、学校や教員に興味がなく、子どものしつけは学校の役割で、さらに勉強もちゃんと教えてくれなきゃ困ると思っている。学校に丸投げだ。そもそも、学校や教員にいい思い出がなく、単に興味がないというよりも心の底では嫌っていることが多い。だから価値観として“反学校”なのだ。リーマン系は学校や教員に理解があり、しつけは家庭の役割、学校は勉強するところだと思っている。そのぶん勉強への要求は高くなり、チェックが厳しい。“従学校”なのである。……

知人に、中学時代の初恋の相手と結婚した女性がいる。「それはよかったね」というと、「よくもないですよ」と浮かない返事。……階層を飛び越す結婚だったのである。彼女はしっかりとした家庭で育てており、旦那はヤンキー系の家庭出身なのだ。彼女からもらったメールの表現を借りよう。

旦那の友だちと話していても、すごく頭わるくてついていけないです。女は男より下だという考えが凄くて、でも実際は嫁の稼ぎがないとやっていけない低収入。自分の男友だちは東大とか東工大の人たちばかりなので、そのあまりの頭（常識含む）のレベルと経済の格差にときどきがっかりしています。もちろん敗者の気持ちがわかるとか優しいところもたくさんあるし、いい人もいるのですが。……「きみたちは社会の底辺なんだよ。きみたちみたいに考えないで働く人がいるから、搾取して儲ける人たちが生まれるんだよ」と思ってしまったり……。人間の価値って社



会レベルで決まるものではないのですが、あまりの言動のひどさにそこまで思ってしまうんですね。

とのことだ。……旦那のことは好きか嫌いかといえば好きなのだが、一緒に子育てする気にはなれない。……最近では階層を飛び越す結婚の話はあまり聞かなくなった。そこそこ収入のある男性は防衛に入っており、同じ階層の女性としか結婚しない傾向がある。

岡田斗司夫氏は『オタク学入門』（P.344-349）で次のように述べている。

「子供はこういうものを見てればいい」とか「こんな大人にならなきゃダメ」という抑圧の中から、「反抗の文化」が生まれてくる。……「そんな階級社会文化・メインカルチャーなんかいやだ！」という反抗のパワーの源は抑圧の力だ。……こうして生まれてくるのが「カウンターカルチャー」なのだ。『立派な市民』なんていっても、あんたら戦争ばっかしてるじゃないか。オレたち、そんな『立派な市民』なんかになんねーよ！ 階級社会？ クソくらえ！ メインカルチャー？ クソくらえ！」これがカウンターカルチャーの基本理念だ。……「時間を守る？ そんなコスモスな発想に付き合ってもらえるか！ オレたちはもっとカオスなんだぜ」これが「カウンターカルチャー」の本質なのだ。さて、これが新大陸・アメリカという「あんまり階級社会じゃないところ」へ渡っていった。……ここでカウンターカルチャーは徐々に「サブカルチャー」に変貌した。……アメリカの若者たちには「反抗すべき階級」がなかった。……そこで彼らは「大人になること」そのものに反抗することにしたのだ。「若いってことは、それだけで正しいんだ！ 大人ってことは、それだけで間違ってるんだ！」同時にサブカルチャーがアメリカで生まれた理由として「消費者文化」である、という側面も無視できない。エスタブリッシュメントたちのピューリタニズム（清貧思想）に対するアンチテーゼとして、サブカルチャーは大量消費を翼賛する文化になったのだ。……日本のファッションやサブカルチャーはモノマネの域を出ない。モノマネなのは当然で、日本では大人に対する反抗なんていう思想は本来備わっていない。だから、表面を真似るしかない。

サブカルチャーを「声の文化」、「反抗の文化」、「消費者文化」の三つの側面に分けて考える。前述したように、日本には「声の分化」的な思考様式が色濃く残っているので、「声の分化」的な思考様式が基礎にあるサブカルチャーを受け入れやすい。ただし、日本では、「反抗の文化」の側面を主に受け入れるか、「消費者文化」の側面を主に受け入れるかによって、二つに分かれた。「消費者文化」の側面を主に受け入れたのが、企業が組織的に提供している「消費者文化」としてのサブカルチャーで、「反抗の文化」としての思想を失った人畜無害のファッションである。「反抗の文化」の側面を主に受け入れたのが「不良文化」である。日本では、エスタブリッシュメントや大人による抑圧はあま

り無い。そこで、学校、学歴社会、企業社会に対する反抗、むしろ、学校、学歴社会、企業社会からの逃避に変化した。『立派な社会人』なんていっても、満員電車で長時間通勤、サービス残業続きで、最後にはリストラか過労死。オレたち、そんな『立派な社会人』なんかになんねーよ！ 学歴社会？ クソくらえ！ 勉強？ クソくらえ！」「時間を守る？ そんな学校や会社の発想に付き合ってもらえるか！ オレたちはもっと自由なんだぜ」というわけである。学校や企業は、「文字の文化」に親和的な欧米のメインカルチャーを押し付け、うまく受け入れたかどうかで、人を評価する場（学校は元々そういうものであった、企業はグローバル化への対応のため、そういうものになりつつある）なので、「声の文化」に親和的な者には耐え難いところなのである。

「反抗の文化」は、学校と企業、そして、そこで働く「立派な社会人」にとっては「危険思想」である。そこで、「立派な社会人」は自分たちの子どもが「危険思想」に感染するのを防ぐため、「危険思想」の持ち主でない人と結婚し、「危険思想」の持ち主がいない地域に住み、「危険思想」に感染されやすい子どもがいない私立学校に子どもを通わせ、「子どもの人生に、ということは自分の人生にガスト的なものを持ち込ませないための城壁作り」をしようとする。その結果、社会は「反抗の文化」を肯定する者と否定する者に分裂することになる。その根っこには、「声の文化」に親和的な者と「文字の文化」に親和的な者の対立がある。今のところは、和を保つために、表面的でもいいから「声の文化」に親和的に振る舞え（つまり、庶民的に振る舞え）、あるいは、差別感を与えてはならない（後述する「差別感をなくせば平等になるという発想」という圧力が強い）ため、階級社会化は明瞭ではないが、グローバル化の圧力下で、「マコト主義」信仰に基づく「能力平等観」（「第13回 日本の特殊性と教育 4.「マコト主義」信仰」参照）が失われたら、イギリスにおける中産階級と労働者階級の対立のような階級対立が鮮明化するようになるであろう。

欧米のメインカルチャーは日本の現実から遊離している上に、夾雑物が取り除かれ、純化されたものが日本に輸入されたため、きわめて抽象度が高いものとなり、それを理解するためには高度の抽象的思考能力と背景に対する深い理解を要する。その結果、内容に対する深い理解なく、知識を丸暗記し、欧米の学問の受け売りをするだけで、それを現実に活用することのできない人が多くなる。「知的主体」たちの視座は、つねにここ（ジャパンローカル）の外部にあり、それも現実というよりは幻の（理想的な）ヨーロッパ近代からジャパンローカルを眺め、位置づけようとしている」（諏訪哲二著『プロ教師の見た教育改革』P.172）。そこから、役に立たないものを暗記しただけの受験学力という批判（学歴社会に対する批判）と学問に対する不信が生まれる。この批判と不信に対して、欧米のメインカルチャーの上辺を覚えただけなのに、自分は「教養」を身につけたと誤解している自称知識人は、欧米の中流階級のまねをして、「特定の知識の集合からなる「教養」とその担い手たる自分を特権化したいという欲望」を持ち、「特定の知識の総体からなる「教養」とそれを「啓蒙」することを夢見て」（大塚英志著「「エリ

ート幻想」の正体]、「中央公論」編集部編『論争・中流崩壊』所収、P.220) しまい、「教育の目的は、人格の完成とか、学ぶことが楽しいとか、文化の伝達などで「あるべき」であって、投資とか金銭的リターンなど「経済的利益」、ましてや「社会的効率」の視点から教育を考えることは良くない」と考え、「教育を受ける側の欲求と社会の要請を無視したまま、「教育は全人格の発達である」、「一生涯学ぶことはすばらしい」といった耳ざわりのいいことばだけ」(山田昌弘著『希望格差社会』P.159) を唱えているというのが日本の現状である。これは、教養に価値を認めず、実利だけを求める大衆に対する恨みでもある。

### 3. 差別感をなくせば平等になるという発想

荻谷剛彦氏が『大衆教育社会のゆくえ』(P.194-197) で、戦後日本の教育と社会には次のような特徴があると指摘している。

貧しさゆえに進学できない子どもたちの差別感を問題視する視線に代わって、勉強のできない生徒の劣等感が問題となった……「貧困と不安定な生活環境からつくられる学業成績の低下は当然の帰結といえるかもしれない」という見方は「袋だたきに」あい、「知能と生活について、貧困者は知能が低いとみるみかたは問題がある」というとらえ方が支配的になった。……高度成長期を迎えて、貧困そのものがだんだんと社会的シーンから見えにくくなるかで、社会階層というカテゴリーとむすびつけて能力差を問題視する視覚もまた、徐々に薄れていった。……階層という視点がフェイドアウトする過程は同時に、個人の能力差にもとづく序列が人びとに差別感を与えるかぎり、そうした序列は排除しなければならないとする、教育問題の構成のしかたが定着していく過程でもあった。……学力によって生徒に違いを付けることの一切を、差別感を生む教育として批判する……「平等な教育」といえば、差別感を与えない教育のことである。……生徒たちが不平等感、差別感を感じないかぎり、教育の平等、不平等の問題は重大な論点にはなりにくい……個人の意識や感情とは別のところにある、教育における不平等という「客観的」な事実を射程に入れなくても、教育における「差別」や「不平等」について語るができるのである。さらにいえば、「能力」や「学力」の階層差を問題視すること自体、めぐまれない階層の子どもたちに差別感を与える教育認識だとして忌避されるようにさえなる。……構造的に生じる教育の<不平等>に目を向けることなく、大衆を学歴取得競争へと巻き込むしくみが、こうして完成したのである。

差別感をなくせば平等になるという発想がなぜ生まれたのであろうか。中根千枝氏は『タテ社会の人間関係』で、次のような指摘をしている。

伝統的に日本人は「働き者」とか「なまけ者」というように、個人の努力差には注目するが、「誰でもやればできるんだ」という能力平等観が非常に根強く存在している。

(P.77)

日本人は、たとえ、貧乏人でも、成功しない者でも、教育のない者でも（同等の能力をもっているということを前提にしているから）、そうでない者と同等に扱われる権利があると信じこんでいる。そういう悪い状態にある者は、たまたま運が悪くて、恵まれなかったのも、そうあるのもであって、決して、自分の能力がないゆえではないと自他ともに認めなければいけないことになっている。しかし、実際の社会生活では、そうした人々は損な立場にたたされている。ところが「貧乏人は麦を食え」などとは、決して口に出すべきことではない。弱き者、貧しき者をそれ相応に遇することを口に出していうことは日本社会ではタブーである。実際に、そうした人々のために本当に働くか、尽力するかは別で、口ではそうすべきだということ自体が美德とされている。(P.100)

どんな社会でも、すべての人が上に行くということは不可能だ。そして社会には、大学を出た人が必要であると同様に、中学校卒の人が必要なのだ。しかし、日本の「タテ」の上向きの運動の激しい社会では、「下積み」という言葉に含まれているように、下層にとどまるということは、非常に心理的な負担となる。なぜならば、上へのルートがあればあるだけに、下にいるということは、競争に負けた者、あるいは没落者であるという含みがいってくるからである。インドに行って驚くことは、貧しい下層カーストの人々が、少しも日本の下層の人々のように心理的にみじめではないということである。これは、そのカーストに生まれれば、死ぬまでそのカーストにとどまる——競争に敗れたという悲惨さがない——という安定した気持ちと、同類がいて、お互いに助け合うという連帯感をもちうるためと思われる。(P.104)

つまり、能力が平等なのに、学力<または、社会・経済的地位>に差があるのは、努力に差があるからだ、学力が低い<または、社会・経済的地位が低い>のは怠け者だからというという考えの下では、学力の低い子ども<または、社会・経済的地位の低い人>は大きな心理的負担を受けている、学校の和<または、社会の和>を保つためには、そのことを話題にしてはいけないのだ、他方、階級社会では、学力<または、社会・経済的地位>に差があるのは、努力では克服しがたい生まれの差であるから、学力の低い子ども<または、社会・経済的地位の低い人>の心理的負担は小さい、そのことを話題にしても学校の秩序<または、社会の秩序>は保たれるということである。差別感をなくせば平等になるという発想は、実体として存在する差別を覆い隠してしまう。差別の実体を見ないふりをすれば、差別はなくなるというのは「言霊」的発想であり（「第1回 はじめに」参照）、表面的な和を取り繕うだけで、差別問題の解決を遠ざけるものである。どれほど不快な事実であっても、和を乱すものであっても、直視し、冷静に分析できな

ければ、問題は解決できない。

日本では、和を保つために、学力が低いのは怠け者だからという責任追及を避けなければならないが、知能の個人差も話題にしてはいけない。そもそも知能に個人差があるのだから、あまり努力しなくても高成績の子どもがいる一方で、努力してもあまり成績が上がらない子どももいるなどということは言うてはならないのである。そのため、教育を受ける機会が平等ではないから、学力差が生じるのだと言い続けなければならない。機会均等でない事柄を探し続けなければならない（「第8回 能力の個人差 2.能力平等観と努力主義がもたらしたもの」参照）。例えば、公立中学・高校は私立中学・高校に比べてレベルが低い、また、学校だけでは高い学力を身に付けられないので、塾・予備校に通う必要があるが、これらにはお金がかかるので、所得が低い階層の子どもは不利な立場に置かれているなどである。吉川徹氏が『学歴分断社会』（P.118-120）で、「現代日本では、格差が親子間で受け継がれるしくみを、家庭の経済力だけに注目して語ろうとする」「親がお金で子どもの学歴を手に入れる。学歴が将来の子どものお金に変わる」「すべてお金のせいにして、お金で解決しようという拝金主義的な教育論を強調する」傾向があると指摘しているが、それは、「能力平等観」「努力主義」とその背後にある「マコト主義」信仰（第13回 日本の特殊性と教育 4.「マコト主義」信仰）を乗り越えることができないからである。学歴はお金で買えると考え、「すべてお金のせいにして」おけば、誰も傷つかず、和を保てるのである。その代わりに、学歴はお金で買った卑しいものとされてしまう。

あまり努力しなくても高成績の子どもがいる一方で、努力してもあまり成績が上がらない子どももいるということは、多くの人が経験上分かっていることであろう。しかし、タブー視されるためか、日本では、このことに関する実証的な研究はほとんどないようである。金子真理子氏が荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学』「7 学力の規定要因」（P.162-163）で、2002年に関東地方の12都市の公立小学校17校で実施された学力調査の結果を分析して、「①階層による学力差は、問題の難易度が高まるほど大きくなる。②階層による学力差は、学習時間が「15分まで」のグループで大きい。③ただし、難易度の高い問題では、階層による学力差は、学習時間が「15分まで」のグループだけでなく、「1時間以上」のグループでも比較的大きくなる。このことから、父非大卒の児童にとって、努力すること（＝長い学習時間）は、学力の階層差を小さくするための最大の武器であるが、難易度の高い問題になると、学習時間が階層差を埋める働きが弱まる可能性がある」と指摘しているが、これは、問題が難しくなるほど、環境と遺伝による知能の差の影響が大きくなり、努力では克服困難になってくるためであると考えられる。なお、決して努力は無意味であると言っているのではない。努力の効果には限界があると言っているのである。「第8回 能力の個人差 2.能力平等観と努力主義がもたらしたもの」で述べたように、努力して勉強すると、知能指数に比べて学力は向上し、職業的な成功につながり、自分の子供の知能も向上する。

#### 4. 環境の違い→努力差→教育格差

学力が低いのは怠け者だからという責任追及を避けるには、努力しないのは自己責任ではない、環境の影響であると主張するという方法がある。例えば、荻谷剛彦氏は『階層化日本と教育危機』(P.180-184、P.214-217)で、出身階層の影響を受けた努力の不平等という考えを提起している。荻谷剛彦氏は同書で「能力の個人差については、遺伝や生活環境の影響を受けることが知られている。それと同様に、意欲や、興味・関心といったことも、成育環境の影響を受けるのだろうか」と問題提起し、1979年と1997年に高校2年生を対象に実施された調査を分析して、社会階層グループ(両親の学歴と父親の職業により3つにグループ分け)が下位になるほど学習意欲が低く、また、1979年から1997年の間に全体的に学習意欲が低下しているが、社会階層グループが下位になるほど低下幅が大きいと指摘している。なお、荻谷剛彦氏は、「学校外での学習時間」、「落第しない程度の成績でいい」という意見に賛成するかどうか、「今の成績に満足している」かどうかを学習意欲の代理指標としている。

また、荻谷剛彦・志水宏吉・清水睦美・諸田裕子著『調査報告「学力低下」の実態』(P.41-46)は、「家の人にはテレビでニュース番組を見る」「家の人から手作りのお菓子を作ってくれる」「小さいとき、家の人に絵本を読んでもらった」「家の人に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」「家にはコンピュータがある」という質問項目への回答をもとに3つの「文化的階層グループ」に分けて、2001年に関西都市圏の小学校(16校)5年生921名と中学校(11校)2年生1281名を対象に実施した調査を分析したところ、下位になるほど学習意欲が低く、学力テスト(算数・数学、国語)の成績も低いことが分かったとしている。

荻谷剛彦氏は、社会階層グループと子どもの学習意欲の相関関係を示しているだけで、社会階層グループが下位になると、なぜ、子どもの学習意欲が低下するのかという仕組みを説明しておらず、次のような推測を述べているだけである(『階層化日本と教育危機』(P.218-220))。

「過度な受験競争」が教育をゆがめているとの認識に導かれ、教育改革は、学業成績を基準とした競争の圧力を教育の世界から取り除くことに全力をあげてきた。……受験競争が維持してきた、個人の外側であって、やる気を引き起こす誘因、すなわちインセンティブを見えにくくしてきたのである。……代わって、子どもたちの学習意欲を引きだす役割として期待されたのが、「新しい学力観」によって主導された「興味・関心」である。それは、……個人の内発的な動機づけに注目した学習論をもとにしている。ところが、この新たな主役は、役回りを十分に演じきっているようにはみえない。……個人の外側にあるインセンティブが見えにくくなった分、全体としての学習意欲の低下が進行しているのである。ところが、意欲の衰退は、すべての子どもたち

に同じように生じているわけではない。……全体としての低下と同時に、社会階層による格差の拡大が進んでいるからである。それは、以下の理由によると考えられる。第一に、社会階層の比較的上位の家庭で育った子どもたちは、たとえインセンティブが見えにくくなっても、その環境ゆえにそれを見抜き、意欲を維持している可能性である。……第二に、社会階層・上位グループの子どもほど、興味・関心をもちやすく、しかもそれを学習意欲に結びつける術（「学ぶことの喜び」－1997年中教審答申）を知っている、つまり、「内発的な動機づけ」による学習が容易であるという可能性である。なるほど、「学ぶことの喜び」を知るためには、それなりの学習経験と知的な構えを要する。……体験学習などにおいて、一見、「学ぶことの喜び」を広くどの子どもにも与えているようにみえても、そこで得られる学習の質と量とは、それぞれの子どもの学習の深さや過去の学習経験の差、基礎学力の差、あるいはより一般的な知的能力の差によって、違ってもくるだろう。……これら二つの理由のいずれが正しいのか、あるいは両方がはたらいっているのかは、今回の分析からはわからない。……インセンティブが見えにくくなることは、学校での成功から降りてしまう、相対的に階層の低いグループの子どもたちにとって、あえて降りることが自己の有能観を高めるはたらきをもつようになっている。……「将来のことを考えるよりも今の生活を楽しみたい」と思い、「あくせく勉強してよい学校や会社に入っても、将来の生活に大した変わりはない」と感じる……しかし、他方で、……意欲を維持しつづける階層の子どもたちがいることを忘れるべきではない。

本田由紀氏は、荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学』「4 学ぶことの意味」(P.95-98)で、前述の『調査報告「学力低下」の実態』の調査結果を分析して次のように指摘している。なお、「学習レリバンス(relevance)」とは「子どもが学習にどのような意味や意義を感じているか」ということであり、「現在のレリバンス」は「学習そのものの「面白さ」を指して」おり、「将来的レリバンス」は「学習が将来何かに「役立つ」といった感覚を意味している」とのことである。

第一に、「学習レリバンス」は……「現在のレリバンス」(面白感)と「将来的レリバンス」(役立ち感)の二つに分類されるが、このうち後者の方が子どもの間には広範に観察される。そして、「将来的レリバンス」を前提条件としてその上にさらに積み重なる形で、一部の子どもに「現在のレリバンス」が成立している。……「ゆとり教育」が強調する「現在のレリバンス」……だけでなく、……「将来的レリバンス」の確保や拡充という課題に対して、よりいっそうの政策的・社会的関心が向けられるべきであろう。

第二に、……小5では女子の方が男子よりも両レリバンスをいずれも感じている者の比率が高いのに対し、中2女子は同比率が中2男子を約1割下回っている。……

第三に、……男子が「現在のレリバンス」と「将来的レリバンス」の双方を保持する上で、勉強への自信に加えて家族との密接で良好な関係の重要性が小5よりも中2で明確になるのに対し、女子では「親からの期待」が中2で重要化していることが見いだされた。しかも、「親からの期待」を感じている者の比率は、中2女子において小5女子、中2男子のいずれと比較しても明らかに小さい。……必ずしも女性の職業的・社会的活躍を積極的に奨励し応援するような環境になっていない現代日本において、多くの親は女子に対して大きな「期待」をかけないが、その中で「親からの期待」を感じることができている一部の女子が、学習に対して「現在の」ないし「将来的」なレリバンスを見いだす傾向があるということである。逆に中2男子にとっては大なり小なり「親からの期待」を受けることはむしろ普通だが、家族との密なコミュニケーションやサポートが成立しているケースは相対的に希少であり、そうした希少な条件を享受できている者が二つの「レリバンス」をともに感じる傾向がある。……

第四に、……男子の場合には、……「学習レリバンス」が教育達成を高める固有の効果を持っている——その効果は双方のレリバンスを感じている場合の方が「将来的レリバンス」のみの場合よりも大きい——のに対し、女子では「学習レリバンス」固有の効果は見いだされなかった。また生涯学習を促進する自己意識への影響に関する分析結果では、「将来的レリバンス」と「現在のレリバンス」の両方を感じている場合にのみ、そうした意識が向上することが、男子・女子のいずれについても確認された。この影響関係は男子よりも女子において明確である。……「将来的レリバンス」は一時的・表面的な効果はある程度もちうるが、学習へのより本質的な動機付けという点では、「現在のレリバンス」が不可欠の条件となる。……「将来的レリバンス」は、確かに日本の教育達成を牽引する働きを担ってきたとしても、子どもの自己意識に持続的な変化を与えるような深さをもつ学習を導くものではなかったと思われる。それゆえ、「ゆとり教育」派が「現在のレリバンス」を課題として掲げることにも、それなりの正当性を見いだすことができる。

「内発的な動機づけ」「現在のレリバンス」は「学ぶことの喜び」「学習そのもの「面白さ」」に基づいているから、子どもの意欲・関心の向かう方向と知能の影響を強く受ける。理解できないものを面白いと思うことはできない。理解する力は知能に左右される。どのように指導方法を工夫しても、理解できない子どもは残る。理解の深さも違う。指導方法を工夫すれば、すべての子どもが理解できるようになるなどというのは、根拠なき楽観論に過ぎない。「第8回能力の個人差 11.才能の差異を増幅する本能」で述べたように、「得意なことをどんどんやり、苦手なことは嫌がりなさい」という才能の差異を増幅する本能が意欲・関心の向かう方向を決める。親からの遺伝によって、知的な活動（ここでは、抽象的思考や抽象的知識を用いる活動という意味で使っている）に適した才能とそれを強化する本能を持っていない（他の分野の活動に適した才能とそれを強化する



本能を持っている) ために、学習意欲を無くしている子どもがいる。「個人の内発的な動機づけに注目した学習論」を展開している人たちは、すべての子どもが、知的な活動に適した才能とそれを強化する本能を持っているという根拠なき理想論を抱いているのであろう。「第 8 回能力の個人差 12. 現代の教育と産業は私たちの遺伝子構造と不適合である」で述べたように、人間は、遺伝的に、全ての人間は同じような心を持っている(他人は自分と同じような心を持っている) と考えるようにつくられているが、現実はそうではない。知的な活動に適した才能とそれを強化する本能を持っていない子どもたちは、「個人の外側にあるインセンティブ」「将来的レリバンス」がなければ、学習意欲をもつことはない。

また、「第 4 回教育の経済効果(その 2) 3. 学校における「社会化」の隠された実体」で述べたように、人間は、進化の過程で長い間、狩猟採取生活を送ってきたので、人間の心は遺伝的に狩猟採取生活に適応的に形成されているが、狩猟採取経済は即時収益システム、つまり、獲得したものは数日の間に消費し、道具や武器を作るのに技術は必要だが労働量は多くないので、未来への計画性はなく、いま現在を生活している(物欲がなく、だらしない) というものだったので、「将来のことを考えるよりも今の生活を楽しまたい」と思うのはごく自然なことである。したがって、「個人の外側にあるインセンティブ」「将来的レリバンス」の影響力は、「内発的な動機づけ」「現在のレリバンス」を持たない子どもに対しては弱くなる。

知的な活動に適した才能とそれを強化する本能を持っていない親が、知的な活動に適した才能とそれを強化する本能を持っていない子どもを産む確率が高いことによって、また、知的な活動に適した才能とそれを強化する本能を持っている親が、知的な活動に適した才能とそれを強化する本能を持っている子どもを産む確率が高いことによって、教育格差が世代間で再生産されることが多いというのは、不快なことではあるが、否定しがたい事実であろう。

以上に述べたことは、「文字の文化」の立場に立った見方である。「声の文化」の立場に立てば、別の見方があることに気付く。福地誠氏は『教育格差が日本を没落させる』(P.96-98) で次のように述べている。

知人 A さんのお嬢さんが高校に入った。そこで A さんは、いいバイト先をみつけて、バイトしまくる高校生活を送るようにハッパをかけたという。……

「あたしも高校のときはバイトばかりで、学校よりそっちのほうがずっと楽しかったし、学ぶことも多かったのね。それは今になっても大きな財産だと感じている。だから高校時代はいいバイト生活を送って、自分の携帯代や遊ぶお金もそこから出しなさい。そうすればお金の大切さもわかるからって、そう言い聞かせてるの」

この話を聞いたときには、まさに職業が再生産される瞬間を見たように感じてしまった。……

サービス業に従事する A さんにとって、高校時代からのバイト経験は今の仕事につながっている。

高校生活といたら、まずは大学に行くための勉強だという価値観の人がいたでしょう。その人はこんなふうに言うのではないか。

「バイト先の人と遊ぶことを覚えると、勉強がおろそかになっちゃうわよ。バイトは夏休みくらいにしておけば」

この意見は、A さんからすればなんてつまらない高校生活かと感じられるだろう。バイトしなかったら、お金も不自由だし、仲間もできない。恋愛のチャンスだって少なくなる。頭がいい人は大変ねと。……

高校＝勉強と思う人と、高校＝バイトと思う人の二種類がいるのである。子どもがどちらになるかは、入る高校によって決まる部分も大きいですが、それ以前に家庭の価値観で決まる。そして、バイト派の家庭の子は不思議と勉強が得意ではなく、バイト派が多い高校に入ってバイト生活に入るのである。

「高校＝バイトと思う人」の価値観は、イギリスの労働者階級や「反学校の文化」の価値観と、「高校＝勉強と思う人」の価値観は、イギリスの中産階級の価値観とそれぞれ同じである。ポール・ウィリスは『ハマータウンの野郎ども』で次のように指摘している。なお、＜野郎ども＞というのはイギリスの労働者階級が優勢を占める **Secondary Modern School**（義務教育を終えてすぐ就職する 11 歳から 15（～16）歳の子どもを対象にした学校）に通う反抗的な生徒のことである。

＜野郎ども＞は……アルバイトの口を探してまわり、……小銭をかせぐ。……アルバイトを通学よりも大事なことと考えてきた。……自分でかせいだ金を自分の判断で使うことに……誇りを感じている。……塗装や内装の仕事……そういう仕事こそ「本物の」ワーク（労働・学習）だと思っており、学校生活はどちらかといえば強いられた休日のようなものだ。「実社会」でたち働いて「金をこしらえる」能力……そして自分の金でおとなたちと対等に取引する能力……。＜野郎ども＞が自信を強くし、学校が教えるよりもある意味では「もっとよく世の中を知っている」と自負するのは、疑いなくこうした能力を意識しているからなのである。そこでは教師に対して優越感を覚えることさえまれではない。「この世の中のこと」を教師はどれほど知っているのだろうか？ なぜと言って、教師は学校や大学のそとに出たことがないではないか。

(P.102-103)

学校の授業をさげすむ＜野郎ども＞は、なにかにつけて、自分たちのほうがものごとをよく知っていると感じている。同じように……労働階級は、理論よりも実践だ、という根ぶかい感情をもっている。……実践的な行動力こそが第一に大切なので、いろいろな知識はそのうえでのことなのである。中産階級の文化のなかでは、教養や資

格は現実の生産行為に代わる個人的な出世の道具とみなされるが、労働階級の目からみれば、およそ知識なるものは具体的な生産労働に固く結びついているべきものなのだ。その実践の場でもちこたえられないような知識は排斥される。……ものごとを実行し、現実の課業をやり遂げ、自然をつくり変える、ほんとうにその手助けとなるかぎりでは理論は意義をもつという労働階級の観点は、階級社会のなかに埋め込まれることさえなければ、合理的な観点となりうることだろう。……しかし、階級社会におけるみずからの地位にもっと敏感な中産階級の場合には、理論的知識は社会の階梯をよじのぼるための資格証明という社会的装飾をまとして現われる。その場合には、自然という対象にたとえ適用されることがなくても理論はそれ自体で持つに値するものとなる。この種の理論は、対象としての自然を都合に応じて適当に切り分ける手段として、ときには自然とのかかわりを一切無視しさえする手段として、それですでに目的を達しているのだ。(P.143-145)

「高校＝バイトと思う人」、イギリスの労働者階級、〈野郎ども〉は、どのようにして「本物の」「学習」をするのだろうか。それは、「実践的な行動力」に優れており、尊敬できる人の行動をまねすることによってである。したがって、「実践的な行動力」をもたず、彼らには空理空論と思える文言を机上で教えるばかりの教師は尊敬の対象ではなく、まねるべき相手ではない。永山彦三郎氏は『現場から見た教育改革』(P.160-162)で次のように指摘している。

茨城のサーファーでは知らない者はいないレジェンドサーファー、小野功さんとその息子さん、そして娘さんたち……は、特に息子さんのプロサーファー、小野嘉夫さん、そして「サンサーフ」という、これまた茨城では知らない者はいないという老舗のサーフィンショップをやっている姉の道子さんが中心となって、地域の小学生、中学生、高校生のためのサーフィン大会を企画し、実践している。……ある分野において功績をあげた者に対する尊敬、という意味において、今の子どもたちはそういうことに、けっこう無条件で感服する。だから小野さんのサーフィン大会において、高校生や一見悪がきそうな子どもたちが一生懸命大会を手伝っているのは、プロサーファーとしての嘉夫氏へのリスペクト、「サンサーフ」という老舗サーフブランドに対するリスペクトに他ならない。

「高校＝バイトと思う人」やイギリスの労働者階級、「反学校の文化」の価値観は「声の文化」の価値観と同じである。ウォルター・J・オングは『声の文化と文字の文化』で次のように述べている。

声の文化のなかで生活する人ごとは、……多くのことを学び、おおいなる知恵を身に

つけ、それを実践している。しかし、かれらは「研究」することはない。このような人びとは、見習い修業によってものごとを学ぶ。たとえば、経験ある猟師のあとについて猟を学ぶように。また、これも一種の見習い修業である徒弟奉公によって学ぶ。そして、人の言うことを聞き、聞いたことをくりかえすことによって学ぶ。さらにまた、ことわざをおぼえ、それらをたがいに結びつけたり組みかえたりするしかたを身につけることによって、また、ことわざ以外のきまり文句的な言いかたを自分のものにするによって学び、一種の集団的な過去に参加することによって学ぶ。(P. 27)

声の文化には、商売のためのハウ・トゥー・マニュアル〔手引き〕にあたるようなものがまったくない……商売のやりかたなどは徒弟奉公で学ばれた……つまり、見習い〔観察と実践〕で学ばれるのであって、ことばによる説明などは最小限にしかあたえられないのである。(P. 95)

南太平洋のプラウト島の島民たちは、自分たちの船頭を尊敬しているという。……船頭たちは、複雑で困難な技能を身につけるために、知的に非常にすぐれていなければならない。ところで、なぜそうした船頭たちが尊敬されているかといえば、かれらが「知的にすぐれている」からではなく、まったく単純に、かれらがよい船頭であるからである。また、村の学校の新しい校長をどう思うかときかれて、ある中央アフリカ人は……こう答えた……。「かれの踊りっぷりをちょっと見てみましょう」。声の文化のなかで生きている人びとは、知的な能力を、人為的に作られた教科書式のクイズ〔に答える力〕から推定されるものではなく、操作的なコンテキストのなかに置かれているものとするのである。(P. 120)

「高校＝勉強と思う人」やイギリスの中産階級は「文字の文化」に親和的であり、「高校＝バイトと思う人」やイギリスの労働者階級は「声の文化」に親和的である。「文字の文化」において、知識は現実を抽象化した理論モデルである学問の中にあり、学ぶということはその学問を学ぶことであるが、「声の文化」において、知恵は具体的な行動の中に暗黙知（ある活動を行う際に脳内で働いているが明示的に意識化されていない手続き的知識、潜在記憶）としてあるので、学ぶということは具体的な現実を経験し、その中で最も優れた行動ができる、つまり、尊敬できると思う人のまねをすることで、暗黙知を習得することである。現実そのものではない学問を学んでも暗黙知をうまく習得できない。だから、バイトの方が学校より学ぶことが多いと感じるのである。「文字の文化」に親和的になるか、「声の文化」に親和的になるかは遺伝と家庭環境に大きく影響されるので、「バイト派の家庭の子は不思議と勉強が得意ではなく、バイト派が多い高校に入ってバイト生活に入る」ということになる。

つまり、学ぶ意欲に格差があるのではなくて、学び方に差があるのである。学校が要求する「文字の文化」の学び方を嫌う生徒が、「文字の文化」の方法で学ぶ事に対して、意欲をなくしているだけである。彼らの多くは怠け者ではなく、「声の文化」の方法での

学び、つまり、実践による習得（まねをして実際にやってみること）ならば喜んで行こう。永山彦三郎氏は『現場から見た教育改革』（P.184-186）で次のように主張している。

僕は子どもと現場で長年接していて確信していることがある。それはどの子だって、学びたい、頑張りたい、一生懸命生きていきたい、と思っている、ということだ。問題は今の教育システムが子どもたちのそのような真摯な気持ちに応えられるだけの複線的な、選択肢の豊富なシステムになっていない、ということである。……ヤンキー化していく子どもたちの問題の根っこには、貧弱な選択肢と貧弱な将来プランしか提示しえない旧来型学校教育システムがある。というより貧弱な社会のシステムがある。……今の子どもたちだって大人が考えているほど根性がないわけではない。ただ根性を出せる対象にぶつかっていないだけなのだ。あるいはそうしたものに出会えないシステムに幽閉されているだけなのだ。

「旧来型学校教育システム」は、「声の文化」の方法での学びは学びではないと考え、「文字の文化」の方法で学ぶことを強要し、「具体的思考」を「抽象的思考」に改造する場であるが、それは、近代化、産業化に対応できる人間を養成するためである（「第4回 教育の経済効果（その2） 3. 学校における「社会化」の隠された実体」参照）。「声の文化」に親和的な「ヤンキー化していく子どもたち」に「頑張りたい」という気持ちを起こさせ、「根性を出」させるには、「声の文化」の方法での学びを学びと認め、実践による教育を行う必要があるが、それは、近代化、産業化に対応できない人間を養成することになる。機械化、コンピュータ化、マニュアル化が、実践による習得が必要な仕事を減らし、「抽象的思考」が必要な仕事を増やしているからである。つまり、教育を変えても、経済・社会システムを変えなければ、失業者の群れを作り出すだけであり、「ヤンキー化していく子どもたち」に「頑張りたい」という気持ちを起こさせることはできないのである。しかし、「社会・経済システム」を変えると、生産性が低下し、経済はマイナス成長に陥ってしまうというジレンマがある。このことに関しては、「第12回 暗黒の情報社会と教育」で詳細に論じる。そもそも、教育を「声の文化」の方法での学びと「文字の文化」の方法での学びの2つのコースに分けることは、差別感を与えることになるので、日本では許されないであろう。斉藤貴男氏は『機会不平等』（P.63）で、京都経済同友会の教育改革に関する提言「世紀末の日本と教育改革 一緊急提言一」を紹介し、批判している。

京都経済同友会……が2000年9月に発表した……教育改革に関する提言は、中学校の義務教育廃止さえ訴えていた。

<日本人として必要な最低限の学力等は小学校で身に付くようにする。特殊な技能を身につけたい者は、義務教育終了後直ちに家業を見習い、親方棟梁等のもとに弟子

入りし、あるいは各種の職業学校に進学する道を開く。社会は多様な人材を必要としている。学力に自信がなければ手足を使う技能者・技術者として世に出ればよい。できるだけ早く体で覚え込まなければ大成しない技能が、この世には存在する。勉強嫌いをいつまでも学校に引っ張り、やる気と自信を失わせ、いたずらに不登校を増やし、教師に苦勞をかける無駄は、12歳で打ち止めとしたい。義務教育＝強制教育の短縮（小学6年のみ）に踏み込むべき時である。>

どうせ使用人にしかねない、させない子供に教育などもっての外。余計な知恵をつけるだけ邪魔だと、彼らは言いたいのだろうか。

「手足を使う技能者・技術者」の地位を低く見て、低所得に甘んじさせている現状を無視し、機械化、コンピュータ化、マニュアル化が「できるだけ早く体で覚え込まなければ大成しない技能」の必要性をなくしつつあるということが分かっていないという点において、京都経済同友会の提言は論外であるが、「できるだけ早く体で覚え込まなければ大成しない技能が、この世には存在する。勉強嫌いをいつまでも学校に引っ張り、やる気と自信を失わせ、いたずらに不登校を増やし」ているという認識は正しい。

「個人の外側にあるインセンティブ」「将来的レリバンス」の影響力は、学歴に対する本人・家族・友だち等の価値観に影響される。学歴に高い価値を認めていれば影響力は強くなり、学歴に低い価値しか感じなければ影響力は弱くなる。小林雅之氏は『進学格差』(P.63-64)で、「高等教育グランドデザイン策定のための基礎的調査分析（文科省学術創成科学研究費）」（金子元久研究代表）の一環として、全国4000人（男女各2000人）の高校生と保護者を対象に2005年11月に実施した調査の結果に基づいて次のように指摘している。

高校生の教育観にも所得階層差がみられる。たとえば、低所得層ほど、大学に価値をおいていない。「誰でも大学に入れる時代だから、大学をでてもたいした得にはならない」と思っているし（低所得層32%、高所得層19%）、将来の職業や収入に大学を出たかが重要と考えていない（低所得層33%、高所得層20%）。さらに、学歴別賃金差に対する評価をみると、高所得者ほど差を大きくみている。高卒者に比べて大卒者は平均してどのくらい収入が高いと思うかという質問に対して、第I分位では1.38倍であるのに対して、第V分位では、1.47倍となっている。これらは、いずれも教育に対する価値づけや教育へのアスピレーションが所得階層によって差があることを示している。ここでは、高校生の価値観を示したが、親の場合にも同じような価値観の所得階層差がみられる。進路は、こうした教育意識や文化的要因にも大きく規定されており、低い教育の価値づけが進学を阻むものとなっている。

ちなみに、労働政策研究・研修機構『ユースフル労働統計－労働統計加工指標集－2011』

によると、一般労働者の生涯賃金（退職金と定年後も平均的な引退年齢まで働き続けた場合の賃金も含む）は、男性では、大卒 3 億 3 千万円、高卒 2 億 5 千万円で、その差は 1.32 倍である。ただし、「第 2 回 教育経済学の基本 3.大学教育の収益率」で述べたように、大学の入試偏差値が高いほど、卒業者の平均所得が高くなるので、高偏差値の大学を出ると得になるが、低偏差値の大学を出てもたいして得にならないというのが現実の姿である。調査に対して、高所得層は高偏差値の大学を念頭において、低所得層は低偏差値の大学を念頭において、それぞれ回答している可能性もある。長谷川誠氏は「非大学進学者のメンタリティに関する研究 一三重県の分析を中心に一」で、三重県内の高校 3 年生とその保護者へのインタビュー調査の結果に基づいて、次のように指摘している。

大学進学が容易になってくると、進路多様校や専門高校のなかでも、無理してでも進学させたい価値ある大学と、学費を出すまでの価値を見出すことができない大学というように、大学間に差が生じているのである。そして、価値のある大学とは「安定した就職ができる可能性が高い大学」であり、これを実現するためには「社会的に評価の高い大学」に進学する必要があると考えている。しかし、生徒自身や保護者もそのような大学に進学できる学力が備わっていないことを自覚しており、自分たちの将来にとって有効な進路選択を考えると、その選択肢から大学進学が除外されはじめているのである。つまり、生徒や保護者が冷静かつ客観的な視点で自己分析をおこなった結果、大学進学を取りやめているのである。

ポール・ウィリスは『ハマータウンの野郎ども』（P.346-355）で次のように指摘している。

資本制生産様式は精神労働と肉体労働を区別しつつ動員するだけではない。この社会の支配イデオロギーは、精神労働の物心両面における優遇を当然のこととみなしている。……支配イデオロギーそのもの、あるいは学校などで幅をきかす能力主義の考えかたは、万人がほぼ同質の目標を目指して人生を歩むと決めてかかっている。……人びとがみな同じ目標を追求するという虚構には、もうひとつ別の含みがある。すなわち、階級社会の底辺から抜け出せない人びとは、まさに万人共通の目標を成就する能力において劣る人びとであり、みずからもそう認めているということである。……しかし、もちろん現代社会の実相はけっしてこのような虚構で説明しつくされることはない。……実は、下層階級の根幹部分は、能力の低下とともに社会的位置も低下するという能力主義の虚構を認めてはいないのである。そして、これこそが、資本制社会が安定を保つ、意想外な要因のひとつなのである。公認の能力主義に与するのではなくて、社会的地位を測る精神労働・肉体労働のものさしを逆転させてしまう人びとが存在するのだ。……<野郎ども>は、手労働をこそ選好し、また手労働を通じて自

己認識をとげようとする……こうして、みずから劣位の部署を選びとる人びとがいるおかげで、他の人びとは、精神労働を価値とする支配イデオロギーのものさしを安んじて受け入れ、……優位の部署を獲得でき、それに応じた優越感にひたることもできる。……最下層の労働需要を満たす人びとにおいてイデオロギー的な上下序列のどんでん返しが行われなかったとしたら、今日の社会制度はけっして安定を保つことはできない……進んで最下層に甘んじる人びとが存在しなければ、物理的強制力と絶え間ない闘争だけが社会秩序を維持する手段になるだろう。……価値意識のこの逆転……は、二つの別の構造が具体的な社会生活の場で交叉することによって引き起こされるのである。……家父長制にこめられた価値序列と労働の分割にこめられた価値序列とが正負逆転するかたちで交叉する。……肉体労働は家父長の社会的優位と結合し、精神労働は家父長に服従すべき女性の社会的劣位と結合する。この文脈においては、肉体労働こそが、……男性的な威厳を帯びた職域として観念されるのである。……<野郎ども>にとっては、女性を見下す男性としての優越意識が精神労働・肉体労働という常識的な尺度における彼らの劣勢を補っているのであり、さらには肉体労働の価値を底上げすることにもなっているのである。……家父長制的な価値観が精神労働・肉体労働の分業体制を側面から支えるとすれば、逆に、分業体制の側も、それはそれで抑圧的な性差別を助長する。……反学校の文化がホワイトカラーの事務労働を女性的な職域として見下すのは、……女性を、制約をまとった存在、価値の低い存在、積極的にことをなす能力に欠ける存在であると見なす前提があつてのことなのである。……<野郎ども>の網膜に倒立する精神労働の像とは、まさに「ペン先の仕事」であり「現実にはなにものを生み出さないまやかしごと」であり、ずばり言って「女のやること」なのである。……からだで働くということに、<野郎ども>は男らしさを見ようとし、ある確かな手応えを求めようとする。……自負心は、だれでもできるとはかぎらない課業、とくに女性にはできっこないと思われる課業をやりとげることから生まれる。……からだでかせぐ男の自負心においては、目の前の仕事をやりとげること……が男の務めなのであつて、そこに搾取関係が介在するという事実は一とまず意識の枠外にある。……無理な課業や過酷な課業を与えられたとき、弱音を吐くことも、仲間と語らって反抗することも、課業そのものの適否を疑うこともできるはずである。だが、そういう場合でも男らしさの価値意識……が幅をきかせる。それは、弱気を押しこめ、生産の目的にたいする客観的な再検討を封じてしまうのである。

イギリスの労働者階級は、肉体労働は男性的で、精神労働は女性的であるから、肉体労働の方が価値が高いと考えて、肉体労働を選んでいるというのは表面的な見方であると、私は考える。肉体労働は実践によって習得する（まねをしてやってみる）という「声の文化」に親和的であり、精神労働が理論（文章を読むこと）によって学ぶという「文字の文化」に親和的なので、「声の文化」に親和的な者が多い労働者階級が肉体労働を好



み、精神労働を嫌っているというのが真相であり、肉体労働は男性的で、精神労働は女性的であるというのは、労働者階級が自分の好き嫌いや得手不得手を正当化するもっともらしい理屈に過ぎないのではないだろうか。本当は好き嫌いや得手不得手で仕事を選んでいるのだが、それだけでは不安なので、「文字の文化」に親和的な中産階級が作った「精神労働の物心両面における優遇を当然のこととみなしている」「支配イデオロギー」に対抗して、自分の職業選択を正当化してくれる理屈が必要なのである。肉体労働をする自分を昔の誇り高き戦士や狩人になぞらえて自己満足しているのである。経験によって習得する仕事か、理論によって学ぶ仕事かという区別が重要なのであって、肉体労働がマニュアル化され、実践によって習得する要素が減ると、労働者階級は肉体労働を嫌うようになる。肉体労働は、マニュアル化され誰でもできるようになりつつあり、機械の助けにより肉体的な力があまりいらなくなりつつある。その結果、「だれでもできるとはかぎらない課業、とくに女性にはできこないとされる課業」は「だれでもできる課業、女性にもできる課業」になり、労働者階級は自負心を持たないようになり、「社会的地位を測る精神労働・肉体労働のものさしを逆転」しないようになる。そうすると「物理的強制力と絶え間ない闘争だけが社会秩序を維持する手段になる」。ただし、肉体労働の機械化、ロボット化によって、肉体労働そのものが消滅し、労働者階級は「無職者階級」になる可能性がある。この問題に関しては、「第12回 暗黒の情報社会と教育」で論じる。

「声の文化」に親和的な者が自己の職業選択を正当化する理屈は、国や文化によって違った形をとりうる。日本では、学歴社会批判という形をとる。

吉川徹氏は『学歴分断社会』（P.34-37）で次のような指摘をしている。

福沢諭吉は……『学問のすゝめ』の冒頭部分で、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずといえり」と述べました。……では、この後どう続くかご存知でしょうか？……「人は生まれながらにして貴賤貧富の別なし。ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり」。……以来学歴は、社会の上下差の発生装置として公認されました。また学歴によって人生のチャンスが異なるという学歴主義も、日本人の社会の見方にくっきりと刻印されることになったのです。……ではどうしてこの自由で民主的な社会の大原則が、いまではこのように語りにくい状態になっているのでしょうか。これは、高学歴化の進んでいた1950年代に、受験や進路にかんすることで青少年に差別感を与えてはならないという考え方が、教育現場に広まったことにはじまるといわれています。そして、……70～80年代の学歴社会論では、……大卒層の能力・資質の不完全さや、大学教育の問題性が槍玉にあげられました。あわせて、大学に進学しなかった人たちを無用に貶めるべきではない、とも考えられるようになったのです。……高学歴＝「勝ち組」、低学歴＝「負け組」という学歴主義は暗黙の了解にとどめられてしまい、表向きはこれらと正反対

のことがいわれるようになったのです。……私の勤める大学の1年生に学歴社会のイメージを聞いてみると、……「学歴だけで人を評価することはできません」「自分の大学受験は中身の無い競争でした」という具合です。……就職活動においては、……採用側は「弊社では学歴で人材を分け隔てしていません」……などと無難なことをいって、別の機会に「リクルーター」と呼ばれる同じ大学出身の若手社員が、非公式に応募者と本音や実態をぶつけ合う、というのが昨今の常套手段になっています。

また、佐藤俊樹氏は『不平等社会日本』(P.115-116)で次のような指摘をしている。

大学教員や霞ヶ関のキャリア官僚は、学歴社会の選抜システムを勝ち残ってきた人間である。その人たちが学歴社会や偏差値偏重教育を批判する。……だが、「学歴社会はおかしい、だから私は大学教員をやめます」とか、「学歴社会はおかしい、だから私は官僚をやめます」という話はほとんど聞かない。……「じゃあなんで大学をやめないんですか」「じゃあなぜ官庁をやめないんですか」とまじめにきく人もほとんどいない。なぜか？ 実はこの学歴社会批判は、日本の学歴社会、学歴一昇進の選抜システムをささえている重要な装置の一つだからである。……選抜システムは、……必ず重大な問題をつかかえる。選抜は少数の「勝者」と多数の「敗者」をつくり出す。「敗者」とされた人々は、そのままだと、当然やる気をうしなう。その結果、経済的な活力が大きく殺がれ、社会全体も不安定になる。……選抜社会をうまく運営していくためには、「敗者」とされた人々が、意欲と希望と社会への信頼をうしなわないようにしなければならない。……そのしくみは大きく分けて二つある。(a)選抜機会の多元化 (b)選抜自体の意味の空虚化 である。(a)選抜機会の多元化とは、選抜される機会が一律一元には出現せず、……時期や選抜の方法(例えば評価者側の基準)に多様性があることである。多様性があるとある程度の不公平はさけられないが、その分、「敗者」は「評価する人間がたまたまわるかったからだ」とか「評価される機会をまだちゃんとあたえられていないからだ」と思える。……それによって、「敗者」とされた人も次に来よう機会をねらって、意欲を保ちつづけることができる。……ところが、日本の選抜システムは形式的には高度に平等で、全員を同じ年齢で一律に選抜にのせる。その上、選抜の方法も主観的な偏りがはいるにくいペーパーテストが主で、選抜機会はかなり強く一元化されている。その分、「敗者」とされた人は「向こうの見る目がなかったのだ」といった解釈をしづらい。……それゆえ、(b)のしくみに強くかたむく。「選抜そのものが実は空虚なのだ」と選抜の勝者が言明する。エリートがエリートであることを自己否定する形で、「敗者」の意欲をそがないようにする。簡単にいえば、「ボク、テストでいい点とるのがうまいだけなんです！」とエリート自身が告白したり、自己批判することは、この社会の選抜システムにとって、重要な「お約束」の一つなのである。

低学歴・低所得層は偽善的な学歴社会批判を真に受けて学習意欲を低下させるが、高学歴・高所得層は本当のことを知っていて、だまされないので（だまされているふりをしているだけなので）、学習意欲を保てるということであるが、低学歴・低所得層はだまされたというよりは、学歴社会批判を受け入れることによって、自分が大学に進学せず、低所得の仕事についたということを正当化し、精神的安定をはかっているという面が強いと思われる。前述のように、能力が平等なのに、学力<または、社会・経済的地位>に差があるのは、努力に差があるからだ、学力が低い<または、社会・経済的地位が低い>のは怠け者だからというという考えの下では、学力の低い子ども<または、社会・経済的地位の低い人>は大きな心理的負担を受けている。認知的不協和（相矛盾する二つの考え、態度などを同時に持っている時に生じる緊張状態のこと）の状態にあるのである。しかし、学歴社会批判を真に受ければ、「学歴だけで人を評価」することはできず、「大学受験は中身の無い競争」で、会社は「学歴で人材を分け隔て」しないのだから、「実は空虚」な受験競争で努力しなくても、つまり、勉強しなくても、怠け者だと非難される筋合いはなく、「あくせく勉強してよい学校や会社に入っても、将来の生活に大した変わりはない」「誰でも大学に入れる時代だから、大学をでてもたいした得にはならない」、つまり、低学歴でも社会で不利益を被ることはないと思えることになる。認知的不協和の状態にある人間は、多少怪しげな説でも、それで精神的安定を得られるならば、信じてしまうのである。たばこを吸う人が、たばこは健康に悪いと認めると、認知的不協和の状態に陥るので、ストレスを抱える方が健康に悪いので、ストレス軽減のために、たばこを吸う方が健康に良いという説を信じてしまうのと同じである。また、知的な活動に適した才能とそれを強化する本能を持っていない（他の分野の活動に適した才能とそれを強化する本能を持っている）者にとっては、知的な活動の価値を下げ、他の分野の活動の価値を高める言説は、自分の価値を高めてくれるものであり、自尊心を満たしてくれるものであるから、信じてしまうという面もある。

中村高康氏は近藤博之編『日本の階層システム3 戦後日本の教育社会』「8章 高学歴思考の趨勢」(P.151-173)で、1995年のSSM調査(社会階層と社会移動全国調査)を分析して、年齢が若くなるほど、「学校で人生決まる」「学歴重要」と考える人が減り、「子への高学歴志向」(子どもにはできるだけ高い教育を受けさせるのがよい)は低下するが、「学歴不公平」(学歴による不公平が今の日本社会にある)と感じる人が増える傾向があり、「子への高学歴志向」の低下は高卒者層・雇用労働者層で大きく、高学歴層・ホワイトカラー層で小さいことを示している。若い人ほど、学歴社会批判を真に受ける傾向があるが、その結果、「子への高学歴志向」を低下させているのは高卒者層・雇用労働者層であるということである。つまり、学歴社会批判が高卒者層・雇用労働者の進学意欲を削ぎ、大卒層と高卒層という階層の再生産をもたらしているという面があるのである。

肉体労働は男性的で、精神労働は女性的であるから、肉体労働の方法が価値が高いと

いう正当化は積極的なものだが、学歴社会批判による正当化は消極的なものである。消極的な正当化であるから、「社会的地位を測る精神労働・肉体労働のものさしを逆転」させるほどの力はない。そのため、日本の低学歴・低所得層は、イギリスの労働者階級のようなプライドを持つことができない。日本人に根強い「能力平等観」は、能力は多様であり、どの能力に優れているかには個人差があるという認識を妨げ（能力平等観を貫くと、多様な能力の全てで平等でなければならないから）、実践による習得が必要な能力では勉強好きには負けないという誇りを持たせることを妨げるのである。「能力平等観」が「階級社会の底辺から抜け出せない人びとは、まさに万人共通の目標を成就する能力において劣る人びと」であるという「虚構」を否定することを困難にさせるのである。

学歴社会批判によって、たとえ表面的なものであれ、自分たちが行ってきた勉強という努力の価値を否定せざるをえない「学歴社会の選抜システムを勝ち残ってきた人間」には不満が募り、努力が報われていないと感じ、欧米を見習い、自分たちを実質的なエリートにすべく、ノーブレス・オブリージュ（地位の高い者はそれ相応の重い責任・義務を負わなければならないという考え）を強調して、エリート教育論を展開し、社会経済の複雑化・高度化・グローバル化、急速な技術革新により大学院修了者の需要が増えると主張し、学歴による階級社会化を夢見る。彼らの本音は、斉藤貴男著『機会不平等』（P.216）に引用されている竹中平蔵氏のことばに現れている。

竹中教授は語る。

「アメリカにいと、普通に学歴を積んで、プロフェッショナルとして仕事をしている人々の生活水準がいかに高いかということを感じます。なのに日本人は、これだけ頑張りながら、どうして？ それは、一生懸命働いている人が、怠けている人の分まで稼いでいるからです。……」

アメリカでは、「声の文化」に親和的な者が自己の職業選択を正当化する理屈はエヴァンジェリカルによって与えられているようである。小野由美氏は『超・格差社会アメリカの真実』で次のように述べている。

建国に至る 150 年間、東海岸の植民地を支配したイギリス出身の貴族、地主、マーチャント階級は、イギリスでの伝統を受け継ぎ、……多くの学校を設立した。教育を重んじた彼らの伝統は現在もなお受け継がれ、……北東部には一流大学が集積している。プレップスクール……からアイビーリーグへという教育コースは、今でもアメリカのエスタブリッシュメントの苗床になっている。……このようなコースを辿ってきた典型的なエリートに対しては、今でも多くのアメリカ人が、ゴージャスな映画俳優や美人に対するのと同じような魅力を感じているらしい。……実務をやり遂げる段になると頼りにならないことも多いのだが、……彼らに「素晴らしい」とか「全く同感

です」とか言われると、それだけで嬉しくなる人も少なくない。だから……セールスの場には格好の人材だ……組織の顔やシンボルになる高いポジションにはこの種の「魅力的な人」が就いて顧客や株主・従業員を惹きつけ、実務は他の人が引き受けていることも多い。しかし北東部と西海岸の一部を除いた地域……では、高等教育を受けた人に対する反感は一方で未だ根強い。本から得た知識や、理屈を捏ね回して出てきた結論よりも、原始的で直観的な判断の方が正しいという感覚や信念が強く、こうした直観的な判断力は、人工的な教育を受けた人ではなく、自然を教師にして素朴に育った純粋な人間の方が優れている、という暗黙の前提がある。……その背後にあるのは、開拓時代に普及したエヴァンジェリカル（福音主義……）の教えだ。……聖書を神の言葉とし、キリストを信じることによって、人々は聖職者……を介在しなくても神と直結でき、救われるというものだ。そして、神が人間に授けた基本的な知恵は、強い faith（信仰）によって強化され、強い信仰を持って優れたキャラクター（人格）に成長した人は、正しい判断を下せる。だから知識や教育よりも信仰の方が遙かに大切である。人工的な教育は信仰を弱め、神が人間に与えた本来の知恵を壊し、優れたキャラクターを作るうえで逆効果である。したがって高等教育を受けた人間は信用できない——、とつながるわけだ。……だから大統領選挙になると、候補者は大統領たるにふさわしいキャラクターであることを強調し、決して学歴を宣伝しない。……ブッシュは東部のエスタブリッシュメントであることは宣伝せず、演説には中学生のボキャブラリーに含まれる言葉だけを使い、テキサス・カウボーイのライフスタイルを演じて、国民との近しさを強調している。（P.175-177）

アメリカ人の圧倒的な多数が教育を敵視する中で、彼らを説得して公共の学校を作るためには、教育は即効的な実利を生むものでなければならなかった。……つまり職業訓練の枠に縛られることになった。……北東部のインテリ階層は、独立戦争から建国の時代には政治をリードしていたものの、その後の 100 年間は政権から疎外され、徐々に増えていた学者層は、政治やビジネスに登場する機会を持ち得なかった。……インテリや学者たちは、20 世紀にはいつから政治や技術開発、ビジネスの場に登場するようになってきたが、それは……政権や資本にとっての有用性を証明し、存在価値を証明するところから出発した。したがってインテリに期待されたのは、パワーに対するテクノクラートとしての役割であって、思想的リーダーとしての役割ではなかった。（P.181-182）

大卒人口比率の全米平均は 27%だが、北東部の沿岸諸州は 50%近い。それに対し、南部や中央部は 20%に満たない州が多い。南部は大学進学率が低く、平均所得も低くて貧困層も多いなど、所得水準と学歴には強い相関関係がある。（P.193）

中高年になってから職を失い、希望を失った労働者は、若者のように怒りには走らず、教会に救いを求める。キリスト教ファンダメンタリズムの復活は、追い詰められた労働者層の増大と無関係ではない。……所得の再分配を無用の弊害と考える共和党

の支持基盤は、特権的なエリート層と、自助努力を個人の責任と考える、教育水準が低くて真面目な人々に多い。……そのようなワーキング・クラスこそがアメリカを支えているバックボーンであり、残念ながら犠牲者でもある。(P.198)

アメリカの状況をエヴァンジェリカル対北東部エスタブリッシュメント・インテリとするのは単純化し過ぎている嫌いがあるが、「原始的で直観的な判断の方が正しい」と考え「自然を教師にして」生きる「声の文化」に親和的な者と、「本から得た知識や、理屈を捏ね回して出てきた結論」を尊重し「教育を重んじ」る「文字の文化」に親和的な者の対立があるのは事実であろう。エヴァンジェリカルは信仰なので、「声の文化」に親和的な者が、自分の好き嫌いや得手不得手に基づく行動を正当化する力は極めて強い。「信仰に合わない事実は無視され、信仰に合う事実を信仰を一層強固にする」(小野由美著『超・格差社会アメリカの真実』P.196)からである。そのため、大統領候補やエリート層の演技にだまされ、「所得の再分配を無用の弊害」と信じ込まされ、「犠牲者」となっていることに気づかない。しかし、「暗黒の情報社会」が到来すると(「第12回 暗黒の情報社会と教育」参照)、「声の文化」に親和的な者の仕事はなくなり、「信仰に合わない事実」が存在するという事実を認めざるを得なくなるだろう。そして、「信仰に合わない事実」を作りだしたエスタブリッシュメントとインテリを悪魔とみなし、戦いを挑むことになるであろう。

学部で教養教育を行い、大学院で専門職業教育を行うというアメリカの私立大学のシステムを理想視する人がいるが、「イギリスでの伝統を受け継」いで、エスタブリッシュメントのための教養教育を行っていた私立大学が、「教育は即効的な実利を生む」ことを大衆に示すことを迫られ、「政権や資本にとっての有用性を証明し、存在価値を証明する」ことによって資金を得るために、「テクノクラート」を養成するための専門職業教育を行う大学院を付け足したに過ぎず、決して理想的なシステムなどではない。

学習意欲を無くすのは家庭環境の影響だけでは無い。社会・経済構造の変化により、「努力が報われない機会が増大」し、「親や能力に恵まれ」ない子どもたちが未来に希望も持てないようになっているからだという意見もある。山田昌弘氏は『希望格差社会』(P.193-203)で次のように述べている。なお、「1998年の質的な転換」とは、ニューエコノミーへの変化、つまり、「物を作って売るという工業が主要な産業であった時代から、情報やサービス、知識、文化などを売ることが経済の主流になる時代への変化」(山田昌弘著『新平等社会』P.245)である。

ランドルフ・ネッセ……は希望(hope)という感情は、努力が報われるという見通しがある時に生じ、絶望は、努力してもしなくても同じとしか思えない時に生じると述べている。……苦労や悩みを乗り越える力を与えてくれるものが、希望という感情である。……苦労や悩みが無駄になると感じれば、苦労や悩みは苦痛以外の何もので

もなくなる。……希望をもつ人が多い社会は、発展し、活力がみなぎるだろう。一方、絶望する人が多い社会は、停滞し、墮落し、「社会秩序」が保てなくなるだろう。……

……敗戦と共に、日本社会の共通目標が消滅した、代わりに登場したのが、「豊かな家族生活を築く」という目標である。……豊かな生活とは、広い住宅、家電新製品、そして、子どもの学歴に象徴されていた。それを実現する手段として、職業（男性）、家事労働（女性）、教育（子ども）が配置されていたのである。……真面目に勉強して、努力して学校に入れば、それなりの職が保証された。真面目に働きさえすれば、仕事と収入の増大が保証された。女性は、結婚して、家事・育児を真面目にやりさえすれば、豊かな家族生活が保証された。つまり、勉強、仕事、家事・育児という苦勞、努力は、豊かな家族生活となって報われたのである。それゆえ、戦後から高度成長期を経てバブル期直前までの日本社会は、ほとんどの人にとって希望に満ち溢れた社会であった。……

現在の日本社会は、「努力が報われない機会」が増大する社会となってしまった。……苦勞して勉強して学校に入っても、……フリーターになれば、それまでの努力は水泡と帰する。仕事で努力しても、その実績が評価されずに、リストラされるリスク、収入が上がらないリスクがある。家事・育児を頑張っても家族のために尽くしても、また、家族のために朝から晩まで給料を運んでも、離婚されたらその努力は無駄になる。つまり、「いままで努力してやったことが無駄になるかも知れない」という状況は、平均的能力をもつもののやる気をなくさせるのだ。……「二極化」傾向が、この状況に加わる。教育においては、親や能力に恵まれたものは、努力が報われリスクが少ないパイプに入り込むことができる、企業の中核的正社員に採用されたものは、その努力は認めてもらいやすい。できのいい子どもをもつ親は、その養育努力を賞賛される機会が多いだろう。一方、親に恵まれないものは、努力してもパイプラインから漏れやすいし、フリーターは単純労働で頑張っても中核的正社員になれるわけではない。……希望をもてる人ともてない人、その格差が歴然とひらいているのである。

日本社会において、希望がなくなる、つまり、努力が報われる見通しを人々がもてなくなりはじめたのが、1998年だと私は判断している。……単なる不況とは異なった「質的」な転換がこの年があったと考えられる。それは、社会構造が転換して、リスク化、二極化が不可避のものになったことが、人々の間でも意識され始めたという点なのだ。……1997年までは、二万二千人前後で推移していた自殺者数が、1998年に、約一万人増えて三万二千人となり、それ以降、景気の変動に関わりなく、三万人台で高止まりしている。……「リストラ」という言葉が定着し、それが企業の再構築という本来の意味より、業績悪化を理由とした正社員の大量「解雇」「退職勧奨」という意味として一般に知られるようになる。企業のリストラが始まると、雇用者に二極化が生じる。企業に残った人は、多少苦しくとも業績回復の成果を享受できるのに、解雇された人は将来の見通しが無い。……同じころ中小零細企業の倒産が増加した。……

リストラされた人、倒産した中小零細企業経営者に絶望感が広がったのが、自殺が増えた原因だと考えている。彼らは、いままで行ってきた努力（会社に尽くす、自営で頑張る）が無駄になったと感じたのだ。二極化とは、単に生活状況の格差拡大なのではなく、努力が報われるかどうかという「希望の二極化」なのである。……フリーター……は、……1999年に急増した。……リストラや使い捨てのフリーターを活用することによって、企業は業績を回復する。就職した若年正社員は長時間働く一方、一度、フリーターになった人は、なかなか正社員ルートに戻れないということが生じている。また、家族の分野だと、離婚、できちゃった婚、児童虐待、不登校の増加傾向に拍車がかかるのも、1998年前後からの現象なのである。「希望通りの家族形態を実現できる人」と「希望通りの家族形態を実現する見込みがない人」との格差が広がっている結果の現象と解釈したい。……教育においても……勉強をする生徒としない生徒に分解する傾向が顕著となっている。調査をみても、1990年代後半に、家でほとんど勉強しない生徒、塾に行かない生徒が増加している。

山田昌弘氏のこの見解と前述の荻谷剛彦氏の出身階層の影響を受けた努力の不平等という見解に関して、内田樹氏は『下流志向』（P.98-100）で次のように指摘している。

「教育達成のために努力すると必ず報われる」ということを家族の全員が信じていて、現にその努力の成果を享受している家庭に育った子どもと、「勉強なんかしても意味がない」と広言し、現在社会的に低い階層にいるが、その原因はおのれの努力不足にはないと言い張る親に育てられた子どもとを比べた場合、「努力する動機づけ」において決定的な差ができてしまうことは避けられません。……

リスク社会ではリスクの少ない社会階層とリスクの多い社会階層の二極化が生じています。そして、リスクの少ない社会階層に属する人々は、当然ながら、日々の実践を通じて「努力は報われる」ということを確認し、それによってますます努力することの動機づけを強化し、リスクの多い社会階層に属する人々は、「努力は報われない」ということを骨身にしみて味わい、ますます努力することの動機づけを失う。このフィードバックがきわめて短期間に日本社会を階層化した原因である。

高度成長期において、ほとんどの人が希望を持つことができたのは、経済が成長していることで、ほとんどの人が時の経過とともに豊かになれたということもあるが、「努力主義」とその背後にある「マコト主義」（金山宣夫著『国際感覚と日本人』（P.24）によると「人生や人間関係に対する誠実であり、役割に最善を尽くしてあたるとのこと」「どんな困難な仕事でも、それに対して一意専心、全力投球して、能力の極限に迫る」ということ）を信仰し、それが、当時の経済システムに適合していたことも大きい。高度成長期には欧米というお手本があり、それを努力してまねしていれば、成長できた。また、



マニュアル化されていない単純で定型的な仕事が多かったので、仕事に習熟するという努力が成果に直結することが多かったのである。しかし、1998年の「質的な転換」以後、「努力主義」「マコト主義」は経済システムと不適合をきたすようになった。単純で定型的な仕事はマニュアル化され、習熟するという努力の必要性がなくなり、マニュアル化困難な複雑で非定型な仕事の重要性が増し、努力よりも能力が重要になってきた。また、欧米に追いつくと、まねをしているだけでは、欧米に勝つことはできず、欧米にはない新たなものを創造しなければならなくなったが、創造は努力してできるものではない。日本人は「マコト主義」信仰を脱しつつある（以上のことに関しては、「第12回 暗黒の情報社会と教育」と「第13回 日本の特殊性と教育」で詳細に論じる。）。能力と環境に恵まれなければ、努力しても成果はでない、成果を伴わない努力には何の価値もないという冷厳な事実の人々が気づきはじめたのである。「親や能力に恵まれ」た子どもは努力すると成果がでる可能性が高いが、「親や能力に恵まれ」ない子どもは努力しても成果がでる可能性が低いことに気づき、「親や能力に恵まれ」ない子どもは成果がでる可能性の低い勉強という努力をしないようになったのである。これは経済的に見て合理的な行動である。成果のでる可能性の低い勉強に労力を費やすよりも、成果のでる可能性の高い他のことに労力を使ったり、遊びほうけたりしていた方が、満足度は高まる。この合理的な行動が日本社会を階層化させたというのが、内田樹氏が言いたいことであろう。しかし、「マコト主義」信仰を復活させ、成果のでる可能性が低くても努力するという非合理的な行動をとらせると、少数の子どもは成果をだせるが、多数の子どもは成果をだせず、無駄な努力をさせられたという恨みを抱くことになる。

「得意なことをどんどんやり、苦手なことは嫌がりなさい」という才能の差異を増幅する本能が、成果のでる可能性の高い分野で努力するという合理的な行動を人間にとらせるが、社会・経済的に有用性の高い分野と低い分野があることによって、そのような行動が階層化を招く。しかし、この本能に逆らわせ、苦手な分野で努力させることは、本人に大きな苦痛を与える上に、成果がでる可能性も低い。

## 5. 遺伝→知能の差→教育格差

第三段階は、知能の個人差の遺伝的要因を論じる段階であるが、日本の教育界ではタブー視されている。遺伝と環境の影響を受ける一般知能が低いと、「文字の文化」の「人間の生活世界を記号によって抽象化した理論モデルを用いた」「状況依存的ではない、形式論理的な」認識と思考の方法（抽象的思考）が苦手になるので、「抽象的思考」に基づいた学校での勉強が不得意になるということであるが、この問題については、「第8回能力の個人差」で詳述した。

## 6. 地域格差→教育格差

地域格差が教育格差を生み出すルートには、大学の立地が地域的に偏っていることか

ら、自宅通学ができない場合の経済的負担やそれ以外の負担が問題になるというルートと、大都市には高学歴者が多く、地方には少ないことから、親からの遺伝と家庭環境、そして経済力が学力に影響を与えるというルートがある。

大学の立地が地域的に偏っているという問題に関して、小林雅之氏は『進学格差』(P.58-60)で次のような指摘をしている。

高等教育機会の格差を規定する大きな要因は、高等教育機会そのものの提供の有無である。自宅から通学できる範囲に希望する高等教育機会がなければ、自宅外通学をするか、別の高等教育機会を選択するか……決断を迫られることになる。……高等教育機会は地域別に大きな格差がある。文部科学省「学校基本調査」の都道府県別大学進学率(出身高校所在都道府県別)で……現役大学短大進学率でみると2007年度最も低い沖縄は34%であるのに対して、最も高い京都は63%と約2倍の差がある。……2007年度の大学短大在学者と高卒者の比率( $[(\text{大学在学者数}/4) + (\text{短大在学者数}/2)] / \text{高校卒業生数}$ )をみてみよう。……この指標には二つの大きな留保がある。……県外でも自宅から通学可能な場合もあれば、逆に県内でも自宅外通学が必要な場合もある。……在学者の中には、他の都道府県から流入している者もあるので、在学者数が直ちにその都道府県の高等教育機会をあらわすとは限らない。このため、ここでは、……ラフな指標として用いる。……東京と京都は100%をこえている。どちらも大学短大現役進学率も60%以上できわめて高い。次いで、大阪、神奈川、愛知、福岡といった大都市圏で高くなっている。……これに対して、高等教育の進学機会に恵まれていないのは、和歌山、福島、秋田、三重、岩手などの地方の県である。……卒業生の5人に1人しか県内の大学に進学できない計算になる。……大学進学率もおおむね40%台と低くなっており、高等教育機会に恵まれていないことが進学への制約になっていることを示している。……高等教育機関が多い大都市圏では自宅通学が可能で、生活費が抑えられるのに対して、そうした高等教育機会に恵まれていない地方の場合には、進学イコール自宅外通学で生活費がかからざるを得ない地域も多い。

この問題は、大学が少ない地域に大学を新設したり、地方国立大学の定員や学部を増やしたりすれば解決するという問題ではない。例外もあるが、新設大学は大学間序列の最下位に位置づけられる傾向にあり、そのような大学に進学すると就職等に不利であるとみなされることが多い。歴史の浅い低偏差値の大学の中には、学生を集めることができず、経営難に陥っているところがある。地方国立大学の定員や学部を増やすと、地方国立大学の入試偏差値が下がり、社会的評価が下がるおそれがある。そもそも、地元の国立大学よりも社会的評価の高い大学に進学したいという希望を満たすことはできない。社会的評価の高い大学があちこちに分校をつくるという方法があるかもしれないが、本校と分校で社会的評価に差ができ、分校では嫌だ、本校に行きたいという人が増えるだ

けだろう。結局、大学間格差が問題なのである。

経済的負担の問題は、給付制の奨学金を設ければ解決できるが、経済的負担以外の負担の方は解決困難である。小林雅之氏は『進学格差』(P.62-63)で、「高等教育グランドデザイン策定のための基礎的調査分析(文科省学術創成科学研究費)」(金子元久研究代表)の一環として、全国4000人(男女各2000人)の高校生と保護者を対象に2005年11月に実施した調査の結果に基づいて、「進路を決定する際に女子の方が考慮する点は、自宅通学の可能性(「とてもあてはまる」+「あてはまる」男子57%、女子70%)、家庭の経済的状況(同男子57%、女子63%)で、家族の影響も大きい(同男子64%、女子71%)と答えている。……女子は自宅通学希望が高い(男子44%、女子54%)ことが大きな特徴である。進路の第一希望の決定要因としても、自宅通学を「とても重要」「重要」とする者は、男子57%に対して、女子70%となっている。実際の進路でも、自宅通学は男子68%に対して、女子は78%と多くなっている。このように、女子やその家族が自宅通学を希望したり、選択するのは、必ずしも自宅通学に高等教育機会が制限されていることや経済的な負担だけが要因となっていることだけではないと考えられ、実際に希望している場合も多いとみられる」と指摘している。

お茶の水女子大学・Benesse 教育研究開発センター共同研究『教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書』(2007年に小学校5年生の児童2952名及びその保護者、担任、校長を対象になされた調査)(P.53-63)によると、大都市圏(政令指定都市および通勤通学圏内である市)、市部(大都市圏以外の市)、町村部の違いにより、父母の学歴、職業及び収入階層は次の表のようになっている。

#### 学歴

	父親： 大卒	父親：短大・ 専門学校卒	父親： 高卒	母親： 大卒	母親：短大・ 専門学校卒	母親： 高卒
大都市圏	57.5%	13.6%	29.0%	20.5%	45.5%	34.0%
市部	34.2%	15.7%	50.2%	10.0%	40.0%	50.0%
町村部	29.3%	19.1%	51.6%	8.6%	38.7%	52.7%

「大卒」は大学、大学院の卒業、「短大・専門学校卒」は専門・各種学校、短期大学、高等専門学校の卒業、「高卒」は小学校、中学校、高等学校の卒業

## 職業

	父親：専門・管理	父親：事務・販売	父親：技能	母親：専業主婦	母親：パートタイム	母親：フルタイム
大都市圏	53.9%	24.9%	21.2%	33.4%	44.1%	22.5%
市部	33.8%	23.4%	42.8%	15.0%	45.0%	40.0%
町村部	31.9%	17.7%	50.3%	10.0%	41.9%	48.0%

「専門・管理」は管理的職業、専門・技術的職業、「事務・販売」は販売的職業、事務的職業、「技能」は技能職・労務の職業、運輸の職業、農林漁業の職業、保安・サービスの職業、「パートタイム」はパート・アルバイト、臨時雇い労働、自宅での塾・外国語教室・添削業務など、「フルタイム」はフルタイム雇用、自営業・家業手伝い

## 収入階層

	800万円以上	500万以上800万円未満	500万円未満
大都市圏	42.2%	35.2%	22.6%
市部	23.3%	40.8%	35.9%
町村部	21.6%	37.8%	40.7%

子どもの学力（国語と算数のテストの正答率）を父母の学歴別、職業別、収入階層別に見ると、次の表のようになっている。

## 父母学歴別学力

	父親：大卒	父親：短大・専門学校卒	父親：高卒	母親：大卒	母親：短大・専門学校卒	母親：高卒
大都市圏	64.1%	58.8%	53.7%	67.4%	60.9%	54.5%
市部	61.0%	53.0%	52.0%	63.1%	57.2%	51.7%
町村部	62.6%	56.7%	54.0%	65.8%	58.7%	53.7%
全体	62.9%	56.1%	53.1%	65.9%	59.1%	52.9%

## 父母職業別学力

	父親：専門・管理	父親：事務・販売	父親：技能	母親：専業主婦	母親：パートタイム	母親：フルタイム
大都市圏	63.1%	59.4%	54.7%	62.0%	58.6%	59.9%
市部	59.9%	56.9%	51.2%	58.9%	53.3%	54.8%
町村部	60.5%	59.7%	54.3%	59.1%	55.1%	57.5%
全体	61.6%	58.6%	53.1%	60.7%	55.6%	57.0%

## 収入階層別学力

	800 万円以上	500 万以上 800 万円未満	500 万円未満
大都市圏	63.8%	58.2%	54.7%
市 部	59.4%	55.9%	50.3%
町村部	60.9%	57.2%	53.7%
全 体	62.0%	57.0%	52.6%

同報告書は、父母の学歴が高くなればなるほど、専門・管理職の父親と専業主婦の母親を持たば持つほど、高収入になればなるほど、子どもの学力は高くなり、同じカテゴリーに属する子どもたちをとってみると、大都市圏の子どものほうが他地域の子どもよりも学力が高くなる傾向にある（ただし、父親の職業が技能職あるいは事務・販売職の子どもたちをとってみると、町村部の結果は大都市圏の結果と甲乙つけがたい）と指摘している。学習塾や補習塾に行く子どもが多いことが大都市圏の子どもの学力を支えているのかもしれない。学習塾・補習塾に通っている子どもは大都市圏で 30.8%、市部で 12.6%、町村部で 8.3%である。なお、同報告書では指摘していないが、父母の学歴別にみても、町村部の子どもの学力は大都市圏の子どもの学力に迫っており、市部の子どもの学力の落ち込みが目立つ。町村部では市部に比べ、「ドリルや小テストをする授業」「宿題が出る授業」が多いので、このような授業が学力を支えているのかもしれない。例えば、国語で「ドリルや小テストをする授業」が「よくある」のは、大都市圏 43.1%、市部 39.0%、町村部 47.3%である。結局、大都市圏の子どもの学力は学習塾・補習塾が支え、町村部の子どもの学力は小学校が支えているが、市部では、どちらもあまり支えになっていないため、学力が低いということであろう。

また、同報告書は、「大都市圏の保護者は、「将来を考えると、習い事や塾に通わせないと心配」「できるだけ高い学歴を身につけさせたい」「よい教育を受けることが重要」などと考える傾向が強い。逆に、町村部および市部の保護者は、「学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない」「勉強のことは、子どもの自主性にまかせている」「親や親戚の近くで暮らすことが重要」「仕事で人に尊敬されることが重要」などと考えることが多いようである。……大都市圏の保護者は、「子どもの勉強をみて教えている」「テレビゲームで遊ぶ時間は限定している」「本をよく読む」「美術館や美術の展覧会へよく行く」などと回答する傾向が強い。……大都市圏の保護者は、競争的なサラリーマン社会に生きているのでであろう。「よりよい教育」「より高い学歴」への渴望は、他地域と比べると圧倒的に高いようである」とも指摘している。

典型的に言うと、大都市圏では父母ともに大卒で、父親が管理的職業・専門・技術的職業に就いて、母親は専業主婦で、年収 800 万以上の家族が多く、「できるだけ高い学歴を身につけさせたい」「よい教育を受けることが重要」などと考え、その子どもの学力は高い。市部、町村部では、父母ともに高卒で、父親が技能職・労務の職業・運輸の

職業・農林漁業の職業・保安・サービスの職業に就いて、母親がフルタイムで働き、年収 500 万円未満の家族が多く、「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」「親や親戚の近くで暮らすことが重要」などと考え、その子どもの学力は低い（ただし、市部の方が町村部よりも低い）ということになる。

市部、町村部には高収入の仕事が少なく、大都市圏には高収入の仕事が多いため、大都市圏に高学歴者が移動し、市部、町村部に学歴の低い人が残り、その人たちが子どもを産み、育てる時代になって、子どもの学力が大都市圏では高く、市部、町村部では低いという状態になったのであるが、この子どもの学力差を生み出した要因としては、遺伝、家庭環境、教育、社会環境が考えられる。遺伝、家庭環境の影響を直接示すデータはないが、父母の学歴、特に母親の学歴が高いほど、子どもの学力が高いというデータがそのことを示唆している。父親よりも母親の学歴の影響の方が強いということは、家庭環境の影響がかなりあることを示唆している。この遺伝と環境の影響に打ち勝ち、学力の地域格差を減らすには、市部、町村部で高収入の仕事を増やし、高学歴者を呼び戻すしかないが、これは産業政策の問題である。教育によって、学力の地域格差を減らすには、「ドリルや小テストをする授業」「宿題が出る授業」という旧来型の授業を増やすことが効果的である（旧来型の学力を前提とした考えかもしれないが）。社会環境の影響も無視できない。永山彦三郎氏は『現場から見た教育改革』（P.135）で、「大学に行けといっても、近くに大学がありません。いい会社に入れといっても、いい会社は東京にしかありません（笑）。ですから「〇〇大学に行け」といわれても、近くに大学生もいないし、一流会社の社員もいないから、イメージも湧かない。勉強して高校に行くのはわかるけれど、それから先はどうするのだろう、という疑問がいまの地方の子たちにはあるような気がします」と指摘している。

市部、町村部では「親や親戚の近くで暮らすことが重要」と考えている人が多いということに注目する必要がある。大都市圏では高学歴者向けの高収入の仕事も、低学歴者向けの低収入の仕事もあるので、そんなことを考える必要はないが、市部、町村部では、高学歴者向けの高収入の仕事がないので、子どもが高学歴になるということは親元を離れることを意味し、これが、高学歴志向を妨げている。吉川徹氏は『学歴分断社会』（P.201-202）で次のように指摘している。

誤解を恐れずにいうならば、……親子ともども大学に進学しない世代間関係が繰り返されることも、必ずしも理不尽ではない……階層の上下という見方をすると、下半分にとどまることを意味しますが、そこでの親子関係は多くの場合、安定しています。社会的に高い地位につく可能性は減りますが、その代わり、同じ生活の基盤を世代間で受け渡すことができるからです。裏を返せば、子どもが親を上回る学歴を得た場合、親元を離れて「別世界」の仕事に就くことが多く、生活のスタイルも親子別々になってしまうというリスクがあるのです。典型例を一つだけ挙げておきます。茨城の県北

地域に面接社会調査に行ったときのことで、60代後半の男性に、これまでの人生を振り返っていただきました。高校卒業と同時に地元の大資本の製造業の工場に就職し、そこで定年を迎えた方です。その方にはお子さんが3人いて、いずれも大学に進学していません。そのことについて、次のようにおっしゃっていました。「うちの子はみんな勉強したいと言わなかったから、県立工業高校や県立商業高校を出て、地元の企業に就職して、ずっと働いている。いまはそれぞれ近くに住んでいて、孫の顔をみせにきてくれるんだ。けれども、近所の家で息子や娘を大学に進学させてしまったところは、いまは年寄りの二人暮らしでさびしくなっちゃってるよ。家屋敷もどんどん荒れてくるしね。このあたりには、東京の大学を出た者の働き口なんてないもんだから、東京の方の大学を出ると、あっちで働いて県内には帰ってこないんだ」この方にとって、親子とも高卒という家族のかたちは、「勝ち組」とはいわないまでも、安定した人生の大切な基盤であるようでした。

このまま進むと、大都市圏（＝高学歴・高収入・「文字の文化」）と市部・町村部（＝低学歴・低収入・「声の文化」）で階層に分化するという事態も生じかねない。これを防ぐには、市部、町村部で高収入の仕事を増やし、高学歴者を呼び戻すしかないが、前述のように産業政策の問題である。そもそも、市部・町村部では、低学歴者向けの低収入の仕事もなくなりつつある。経済のグローバル化の影響で、低学歴者向けの低収入の仕事は低賃金の開発途上国に移っている。地域密着型で、簡単には海外に移せない建設・土木業も公共事業の減少で打撃を受けている。「第12回 暗黒の情報社会と教育」で述べる「暗黒の情報社会」が到来すると、低学歴者向けの低収入の仕事はほとんどなくなり、市部、町村部は壊滅状態に陥るであろう。「親子とも高卒という家族のかたちは、「勝ち組」とはいわないまでも、安定した人生の大切な基盤」というのは、つかの間の平安に過ぎない。

## 7. 「機会の平等」は実現不可能

荻谷剛彦氏は『階層化日本と教育危機』（P.169-174）で、アメリカ（1965年のジョンソン大統領の演説で示された考え）では、「機会の平等」とは形式的に同じスタートラインに立たせることであり、「結果の平等」とは機会の利用能力の伸張を阻まれている環境を改善し実質的に同じスタートラインに立たせること（機会の利用能力の平等）と考えられているが、日本では、「機会の平等」は形式的に同一の処遇に接近できるチャンスの量を増やすことであり、「結果の平等」はすべての個人が能力や実績にかかわらず同じ処遇を受けること（事実としての不平等に目を向けることもなく、形式的な処遇の画一性を気にかけることに横滑りしている）のことであると考えられていると指摘している。この対比には疑問がなくもないが、アメリカでは、環境さえ改善すれば皆が同じ能力を持てるようになる（生得的な能力の差は環境改善によって乗り越えることが

できる) という楽観論があり、日本では、生まれに関わりなく皆が同じ素質を持っており、環境に関わりなく努力すれば皆が同じ能力を持てるようになる(能力平等観、努力主義) という楽観論があり、この違いが日米の平等観の違いを生み出していることは確かである。環境さえ改善すれば皆が同じ能力を持てるようになると思ったから、「学校入学以前に教育上の文化的なハンディキャップを克服しようとしたヘッドスタートと呼ばれる補償教育や、マイノリティに一定数の仕事や大学入学の枠をもうけるアフーマティブ・アクション」、能力別学級編成が行われたのであり、生まれに関わりなく皆が同じ素質を持っており、環境に関わりなく努力すれば皆が同じ能力を持てるようになると思ったから、「画一的な教育」が行われ、偏差値や能力別学級編成は差別感を与えるものとして忌避されたのである。しかし、日本でも、環境に関わりなく努力すれば皆が同じ能力を持てるようになるという考えが現実には反していることが理解され始め、「機会の平等」をアメリカでの「結果の平等」、つまり、機会の利用能力の伸張を阻まれている環境を改善し実質的に同じスタートラインに立たせることと考えるのが一般的になってきたように思える。そこで、以下の説明では、「機会の平等」とは機会の利用能力の伸張を阻まれている環境を改善し実質的に同じスタートラインに立たせることとであり、「結果の平等」とはすべての個人が能力や実績にかかわらず同じ処遇を受けることとする。

山崎正和氏は「平等感のある社会へ」(「中央公論」編集部編『論争・中流崩壊』所収、P.283-284) で次のように述べている。

現実には偏見の排除は別として、競争条件の平等化はあくまでも部分的にしか実現できない。現に親の地位や財産は制限するにしても、親から継いだ能力の遺伝子はどう考えるべきか。歴史が偶然に決める地の利や時の利、文明の環境との巡りあわせはどうすればよいのか。……親から土地や金銭を相続するより、数学の才能と想像力を受け継ぎ、偶然この IT 時代に生まれあわせた子供の方が、競争社会の勝利者になれるのである。「機会の平等」は……到達不可能な目標であり、軽信できないことを見切っておかないと深刻な不幸を招く。へたをすると自虐的な努力地獄をつくり、古い「会社人間」のように、成果よりも努力を高く買う非生産的な風潮を養うだろう。……既に「結果の平等」は慎ましく、敗者に安全ネットを設けるところまで目標を縮小した。今や「機会の平等」も正直に、それが実は「希望を抱く自由」、「試みる自由」にすぎないことを認めるべきなのである。こう考えると、人類にとって平等は実現できないばかりか、あるいは不必要な価値ではないかという疑いも芽生えてくる。

また、三浦展氏は『下流社会』(P. 268) で次のように述べている。

もし、完全なる機会均等社会が実現したら、結果の差はすべて純粋に個人的な能力



に帰せられる。しかし、それはそれで非常に過酷な社会ではないかと思える……おまえの成績が悪いのは、親が貧乏だからでも、低学歴だからでもなく、ひとえにおまえの頭が悪いからであり、勉強や仕事に意欲を持ってない性格なんだということになってしまう。言い訳がまったくできないのだ。そしてそれは究極的には、頭の悪さや無気力の原因を遺伝子に求めることになり、悪しき優性思想にたどりつく危険がある。

私は、「第8回 能力の個人差」で「頭の悪さや無気力の原因を遺伝子に求め」たが、優性思想（人類の質をより良くするために、劣悪な血統を絶やそうとする思想）に賛同しているわけではない。そもそも、知能の個人差への遺伝の影響は半分程度（30～80%）、残り半分は環境の影響なので、知能の高い親が知能の低い子どもを産むこともあるし、知能の低い親が知能の高い子どもを産むこともある。つまり、劣悪な血統や優良な血統などというものは存在しない。知能の向上に適さない環境や適した環境が遺伝と相乗効果を起こして、そのような血統があるかのように見えているに過ぎないのであり、知能の向上に適さない環境を無くせば、そのような血統がないことがはっきりと見えてくるはずである。ただし、知能の向上に適さない環境を無くすことが極めて困難であることは「第8回 能力の個人差 10. 認知的文化の差—声の文化と文字の文化」で述べたとおりである。また、人間の質の良し悪し（能力の高低）は絶対的なものではなく、その時の環境との関係で決まるものである。一定時点で良い（環境に適応的である）とされた遺伝子だけを持つ生物は、環境が変われば絶滅する。人類が環境の変化に対応して生き延びるためには、様々なタイプの遺伝子（遺伝的多様性）が必要なのである。

「頭の悪さや無気力の原因を遺伝子に求め」たのは、頭が悪いことや無気力なのは、その人の責任ではないということを主張するためである。生まれつきハンディキャップを背負っているのだから、特別な支援をする必要がある、特に、知能を向上させるための環境を整える必要があるということを主張するためである。「下に手厚く」を原則に、個別学習や習熟度別学習といった試みを容認する学習環境の創出が必要である」（荻谷剛彦著『階層化日本と教育危機』P.227）。勉強のできる子どもに対しては教科書や参考書を与えて自習させ、教師は時々、質問に答えたり、アドバイスを与えたりするだけ十分である。勉強のできる子どもは、遺伝と家庭環境により、知的な活動（ここでは、抽象的思考や抽象的知識を用いる活動という意味で使っている）に適した才能とそれを強化する本能、つまり「自ら学ぶ力」を持っているのだから、インセンティブさえ与えれば、放っておいても勉強する。いわゆる「エリート教育」は無駄である。放っておかれたら勉強できない人間には、「エリート」になる資格はない。勉強のできる子どもの教育費を減らして、勉強のできない子どもの教育費に回すべきである。短期的に経済効率を考えれば（新古典派の経済理論にしたがって考えれば）、同額の教育投資を行った場合、知能の高い子どもの方がより大きな教育成果を上げることができるから、「上に手厚い」教育を行った方が良いことになる（ただし、教育投資の収穫逡減、つまり、教育投資を増や

していくと、教育投資1単位あたりの教育成果が減少することも考慮する必要がある)。しかし、これでは、「落ちこぼれ」とみなされ、希望を失い、現実から逃避しようとして、アディクション（たばこ、酒、買い物、セックス、パチンコ、ゲームセンター、テレビゲーム、ドラッグなど）にはまり、新々宗教など「将来の幸福を約束するもの」にすがり、自暴自棄型、「不幸の道連れ」型の犯罪に走り、ひきこもり、自殺する人が増えてくる（山田昌弘『希望格差社会』P.206-211）。この結果、仕事をまじめにしない人や、全くやろうとしない人が増え、崩壊する家庭の犠牲になる子どもが増え、社会全体の生産力は低下していく。つまり、長期的に経済効率を考えれば、「下に手厚い」教育を行うべきなのである。

ただし、「暗黒の情報社会化」が進むと（「第12回 暗黒の情報社会と教育」参照）、この理屈は成り立たなくなる。「情報の創造」を担当する少数の者（学歴不問であるが、高学歴者が中心になる）以外の人の仕事はマニュアル化等により単純化され、やがて仕事そのものが、低賃金の開発途上国に移されるか、機械化・コンピュータ化・ロボット化されるかして、無くなる。つまり、どれだけ教育を受けても、それに見合う仕事に就けなくなる人が多数となり、「下に手厚い」教育によっては、「落ちこぼれ」とみなされ、希望を失い、現実から逃避しようとする人々の発生を防ぐことはできなくなる。斉藤貴男氏は『機会不平等』（P.40）で、三浦朱門氏が「できん者はできんままで結構。戦後五十年、落ちこぼれの底辺を上げることにばかり注いできた労力を、できる者を限りなく伸ばすことに振り向ける。百人に一人でいい、やがて彼らが国を引っ張っていきます。限りなくできない非才、無才には、せめて実直な精神だけを養っておいてもらえばいいんです」と証言したと述べているが、これは「暗黒の情報社会」に適した教育である。しかし、「暗黒の情報社会化」は、それが持つ非人間性に対する反発から、「第12回 暗黒の情報社会と教育 13.暗黒の文化革命、復古革命、宗教戦争」で述べるように、革新的な変化により阻止されるであろう。

尾木直樹氏が尾木直樹・森永卓郎著『教育格差の真実』（P.107）で、「現場の優れた教師の実践を聞きますと、文部科学省や教育委員会が求めている習熟度別ではなくて、「アプローチ別」授業を展開しているところもある。先日、多摩の中学校に視察に行ったときには、具体物を使ってアプローチする授業と、抽象的に一気に入っちゃうよという授業と、好きなほうを選ぶようになっていました。……習熟度別授業をそのように上手に使っているところは力が伸びるかもしれません」と指摘しているが、「具体物を使ってアプローチする授業」は「声の文化」に基づく具体的思考をする子どもに向けた授業であり、「抽象的に一気に入っちゃうよという授業」とは「文字の文化」に基づく抽象的思考をする子どもに向けた授業である。「具体物を使ってアプローチする授業」は、具体的思考をしているために、学校で一般的な「抽象的に一気に入っちゃうよという授業」について行けなかった子どもを救う（具体的思考を抽象的思考に改造する）可能性がある。また、このようなクラス分けだと「差別感」を与えることも少ないだろう。ただし、具

体物を抽象化して理論を導き出す（これをしないと抽象的思考を身につけることはできないので、学校の授業ではなくなる）際に、具体的思考に執着する子どもがつまり可  
能性が高いので、過剰な期待はできないであろう。

荻谷剛彦氏は『大衆教育社会のゆくえ』（P. 213-214）で次のように述べている。なお、  
（Fishkin 1987）とは、“Fishkin, J. S., (1987), *Liberty versus Equal Opportunity*,  
*Social Philosophy and Policy* 5 (01), 32-48.” のことである。

教育による平等実現の困難さを、アメリカの社会哲学者、フィッシュキン（Fishkin 1987）は、「トリレンマ」と呼ぶ。フィッシュキンによれば、平等に価値を置く自由主義体制のもとでは、つぎの三つの原則を同時に三つともみたすことがむずかしい、トリレンマの状態にあるという。三つの原則とは、(1)メリット、(2)生活機会の平等、(3)家族の自律性である。メリットの原則とは、社会的な地位に人々をつける場合、その人に何ができるかという「能力」を基準に用いることである。生活機会の平等とは、「生まれ」によって子どもたちの将来の社会的での地位が構造的に大きく異なるようになってはならない、将来の生活の見通しは、「生まれ」による制約をうけずに、平等でなくてはならないという原則である。そして、三番目の家族の自律性とは、子育てにおける責任は親にあり、外部の干渉は最小限にくだとめるべきだとする原則である。これら三つの原則のうち、二つをみたすと、他の一つが成立しなくなる。たとえば、メリットの原則と生活機会の平等の原則をみたそうとする場合、社会は、どのような家庭に育つかによって能力の違いが生まれないように、育児を社会の統制下に置かなければならない。そのままにしておけば、文化資本の相続によって、特定の階層が有利になるからである。そこで、たとえば、子どもの集団保育を行なって、それぞれの家族からの文化資本の相続を、社会的にコントロールするでしょう。しかし、これでは、家族の自律性という第三番目の原則を踏みこむことになる。それでは、生活機会の平等と家族の自律性の原則をみたそうとすると、その場合、能力の違いを無視した形式的、機械的な平等を保証することになる。これは、一番目のメリット原則を実現できない状態である。そして、メリットと家族の自律性の原則を保証しようとするれば、……家族ごとに異なる文化資本の伝達が行なわれて、二番目の原則である生活機会の平等が実現できなくなる。

経済格差、文化格差が教育格差につながるのは、親が子どもを育てるからであり、遺伝が教育格差につながるのは、親が子どもを産むからである。これらのことを止めない限り、つまり、国が定めた統一的な基準により集団的に子どもを育てるようにし、国が定めた統一的な基準にしたがって子どもの遺伝子を改造しない限り、完全な「機会の平等」は実現できない（現在の技術では遺伝子改造は不可能なので、現時点では完全な「機会の平等」は実現できないということである）。つまり、人工的に、同一の環境、同一

の遺伝を作りだし、「機会の平等」を実現するのである。そして、これらの施策の結果、生まれてくるのは、皆が同じような能力、性格、容姿を持った個性なき子どもたちである。国家が規格品である子どもを大量生産するようなものである。国家が個人の領域に全面的に介入し、家族制度を否定し、人間の遺伝子を改造し、個性をなくすというようなことをしない限り、完全な「機会の平等」は実現できないのである。このようなことは非人道的なことであり、許せないというのが多数意見であろう。そもそも、遺伝子の多様性を失った人類は、環境の変化に適応できずに滅亡への道を歩むことになる。そうすると、「機会の平等」の実現はあきらめ、「結果の平等」を目指すしかない。しかし、「結果の平等」が人びとから意欲を奪うものであることを、社会主義、共産主義の経験が示している。人びとの意欲がなくなれば、皆が平等に貧しくなるだけである。結局、人びとの不満を和らげるために、家族制度を崩壊させない範囲内で「機会の不平等」を是正し、人びとが意欲を失わない範囲内で「結果の不平等」を是正するという中途半端な施策しかとれないのである。

多様な能力を尊重する社会を実現しても同じことである。社会で必要とされる能力の分野には限りがあるので、個々の分野の範囲内で競争が起こり、優劣、勝ち負けが生まれ、「機会の不平等」と「結果の不平等」の問題が生じる。完全な「機会の平等」を実現しようとする、個々の分野ごとに国が定めた統一的な基準により集団的に子どもを育てるようにし、国が定めた統一的な基準にしたがって子どもの遺伝子を改造しなければならない。自分の子どもをどの分野に進ませるかを親に選ばせると、多少は家族の自律性が尊重されることになるが、人気のある分野に希望が集中してしまう（給料が同じでも、皆がやりたいと思う仕事とやりたくないと思う仕事があるということである）という困った事態が生じて、抽選ということになるだろうから、あまり変わらない。これでは、カースト間に上下のないカースト制であろう。

#### <引用・参考文献>

- 内田樹『下流志向 学ばない子どもたち 働かない若者たち』講談社文庫、2009年
- 岡田斗司夫『オタク学入門 東大「オタク文化論ゼミ」公認テキスト』新潮 OH!文庫、2000年
- 尾木直樹・森永卓郎『教育格差の真実 どこへ行くニッポン社会』小学館 101 新書、2008年
- お茶の水女子大学・Benesse 教育研究開発センター共同研究『教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書』2009年
- [http://benesse.jp/berd/center/open/report/kyoiku\\_kakusa/2008/](http://benesse.jp/berd/center/open/report/kyoiku_kakusa/2008/)
- ウォルター・J・オング『声の文化と文字の文化』桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳、藤原書店、1991年
- 小野由美『超・格差社会アメリカの真実』日経 BP 社、2006年

- 金山宣夫『国際感覚と日本人』NHK ブックス、1989年
- 株式会社ライセンスアカデミー進路情報研究センター『大学の学費に関するアンケート』  
2011年  
<http://licenseacademy.jp/newsrelease/index.html>
- 荻谷剛彦『階層化日本と教育危機 ―不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂、2001年
- 荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ 学歴主義と平等神話の戦後史』中公新書、1995年
- 荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学 調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店、  
2004年
- 荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学 調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店、  
2004年
- 荻谷剛彦・志水宏吉・清水睦美・諸田裕子『調査報告「学力低下」の実態』岩波書店、2002  
年
- 小林雅之『進学格差――深刻化する教育費負担』ちくま新書、2008年
- 近藤博之編『日本の階層システム3 戦後日本の教育社会』東京大学出版会、2000年
- 斉藤貴男『機会不平等』文藝春秋、2000年
- 佐藤俊樹『不平等社会日本 さよなら総中流』中公新書、2000年
- 柴野昌山・菊池城司・竹内洋編『教育社会学』有斐閣、1992年
- 「中央公論」編集部編『論争・中流崩壊』中公新書ラクレ、2001年
- 中根千枝『タテ社会の人間関係 単一社会の理論』講談社現代新書、1967年
- 中根千枝『タテ社会の力学』講談社学術文庫、2009年
- 中野由美子「階層と言語 ―教育社会学における言語研究の位置づけ―」『教育社会学研究』  
第29集、pp.146-160、1974年  
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110001877555>
- 永山彦三郎『現場から見た教育改革』ちくま新書、2002年
- 長谷川寿一・東條正城・大島尚・丹野義彦『はじめて出会う心理学』有斐閣、2000年
- 長谷川誠「非大学進学者のメンタリティに関する研究 ―三重県を中心に―」『佛教  
大学大学院紀要 教育学研究科篇』第38号、2010年
- 福地誠『教育格差が日本を没落させる』洋泉社新書、2008年
- ポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども』熊沢誠・山田潤訳、ちくま学芸文庫、1996  
年
- マックス・ウェーバー『支配の社会学 I』世良晃志郎訳、創文社、1960年
- 三浦展『下流社会 新たな階層集団の出現』光文社新書、2005年
- 矢野眞和「日本の大学が直面している真の課題とは ―教育財政の拡充と研究の基盤整備の  
必要性―」『BERD 2007 No.9』Benesse 教育研究開発センター、2007年  
[http://benesse.jp/berd/center/open/berd/backnumber/2007\\_09/fea\\_yano\\_01.html](http://benesse.jp/berd/center/open/berd/backnumber/2007_09/fea_yano_01.html)
- 山田昌弘『希望格差社会 「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房、2004年

山田昌弘『新平等社会 「希望格差」を超えて』文藝春秋、2006年

山本雅男『ヨーロッパ「近代」の終焉』講談社現代新書、1992年

吉川徹『学歴分断社会』ちくま新書、2009年

労働政策研究・研修機構『ユースフル労働統計－労働統計加工指標集－2011』2011年

<http://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/kako/>

(2011年7月8日初出、2011年11月30日改訂)

<福田光宏のホームページ> <http://fukuda.mond.jp/>